

始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

11
440

瑞岡珍牛禪師 全



瑞岡珍牛禪師

大正
10. 5. 2
内交

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through or ghosting from the reverse side.

Vertical calligraphic text on the right side of the left page, starting with a seal.

永年元路六千皮



地放光動



乙酉年冬月
永平元歲



弘 禪
坡 國



大正十年酉年

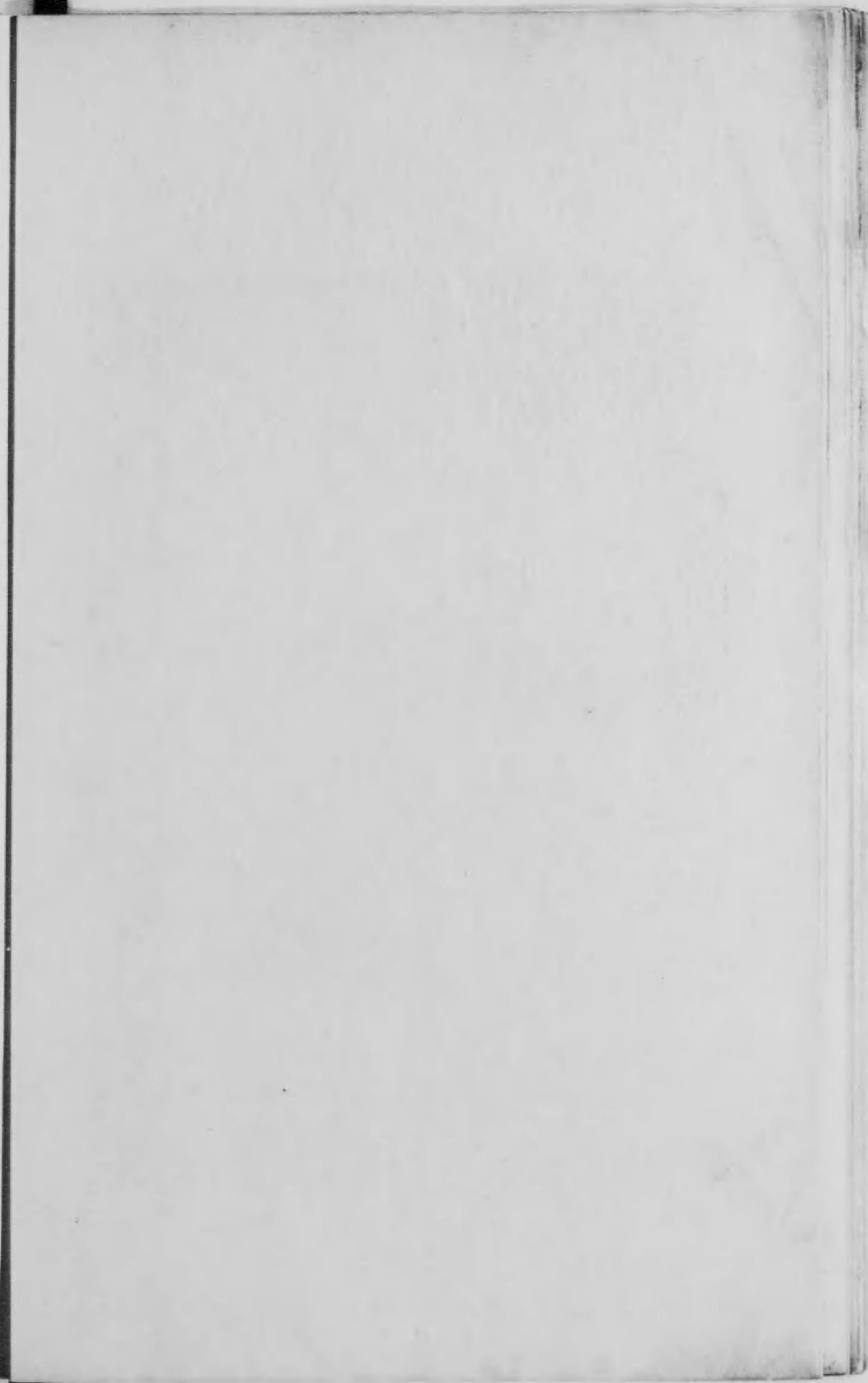
孟春

總持石禪敬題





山院



卷頭掲載寫眞解題

- 一 亮天禪師御肖像珍牛禪師筆亮天禪師贊(法華寺所藏)
- 二 珍牛禪師鏡に對して自ら安眠せる坐像を畫き給ひ、道友豪潮律師之に贊を加へられたるなり(佐藤家所藏)
- 三 珍牛禪師背面坐像畫贊、此の畫贊は、禪師大患中法弟堅光師御見舞の爲訪問せられたるの際、禪師之を畫き給ひ、而して堅光師之に狂歌を書き添へられたるなり、實に是れ禪師最後の絶筆なり(佐藤家所藏)
- 四 珍牛禪師眞筆、寒山拾得の畫贊、並に大黒天の畫贊(佐藤家所藏)
- 五 禪師、法嗣桃嶺師に與へ給へる付法の偈、眞蹟也(法孫元峰所持)

瑞岡珍牛禪師法系圖

●釋迦牟尼佛……(中略二十七祖)——

●支那初祖菩提達磨——二祖太祖慧可——三祖鑑智僧璨——四祖大醫道信——五祖大滿弘忍——六祖曹谿高祖大鑑慧能——

——南嶽懷讓……(下略)——

——青原行思——著參同契石頭希遷——藥山惟儼——雲巖曇成——著寶鏡三昧洞山良价……(中略十一祖)……天童如淨——

●日本高祖永平道元——二祖孤雲懷奘——三祖徹通義介——四祖日本太祖瑩山紹瑾——五祖峩山紹碩——

——六祖通幻寂靈——了菴慧明——無極慧徹——月江正文——萃叟正夢——絕芳正育——乾叟正亨——

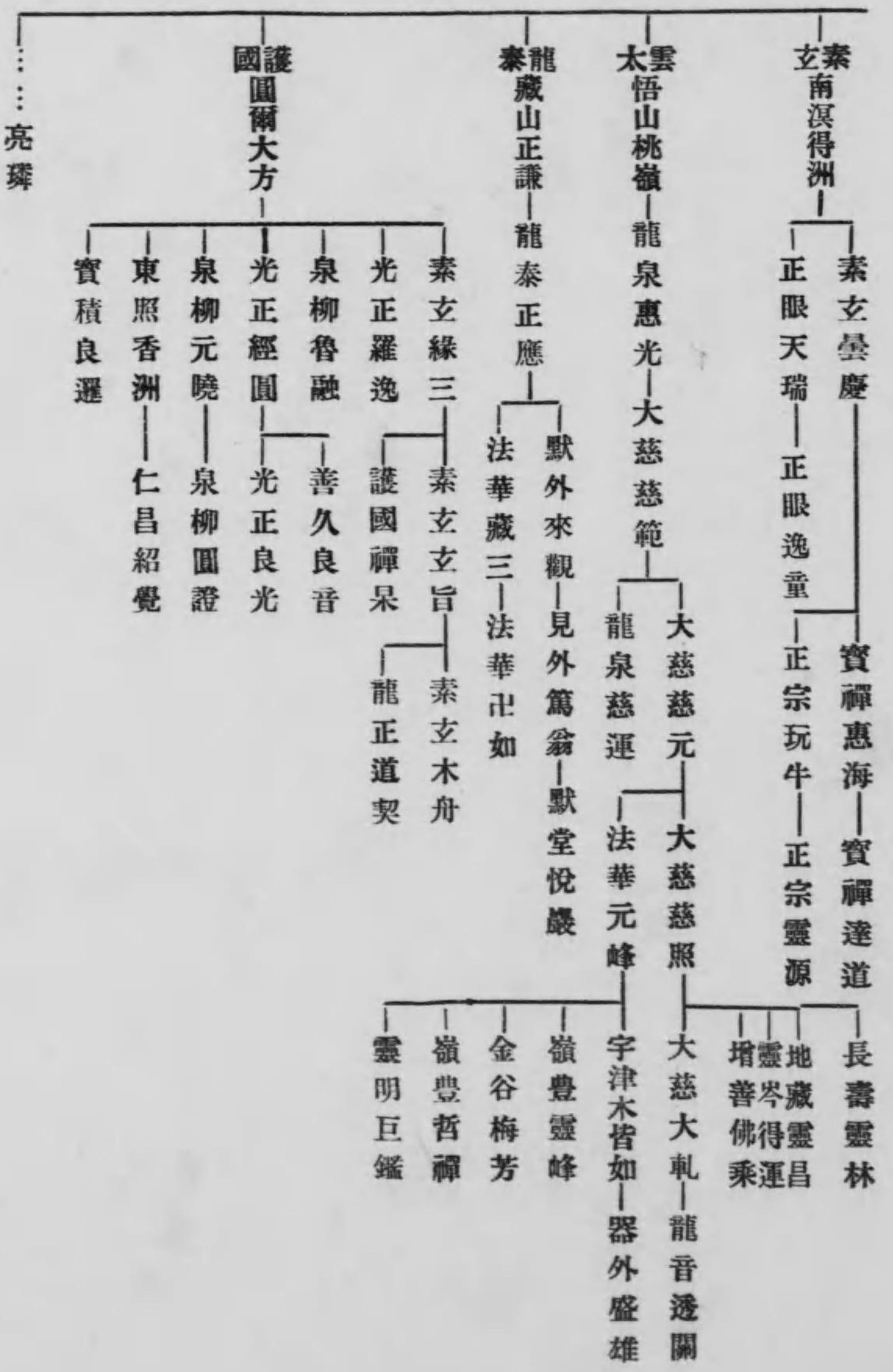
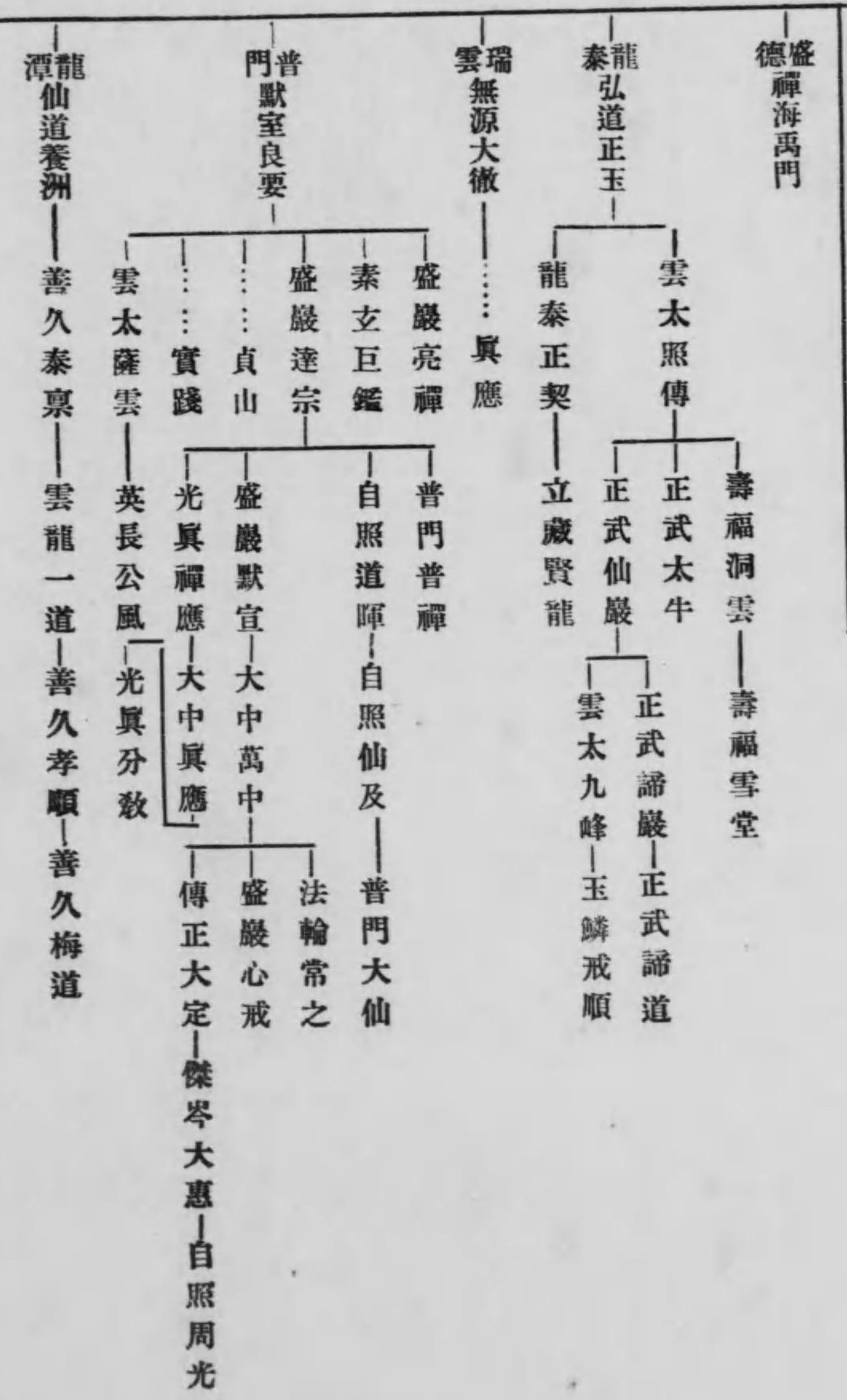
——大質正圭——蘭恕正賀——林叟正芳——枝深正孫——大圓正實——光山正玄——梅翁正嶺——

——大洞正桃——大建正巨——彭山正仙——蘭室正芳——中岩正的——朝國正補——天菴正堯——

——長靈正鎮——愚屋正癡——放龜山正雪——祥山正義——中峰古道——大鏡公龜——鐵額陝牛——

——大實藏海——海外亮天——瑞岡珍牛○

○瑞岡珍牛禪師法嗣十人



瑞岡珍牛禪師御自著傳發見に就て

這回、瑞岡珍牛禪師の御事蹟謹稿に際して、御行化の事實、並に其年月の上に於て、頗る明析を缺くものあり、爲に八方搜索を試み、幾度か調査を重ねたるも、未だ其信すべき證憑に接せず、夢寐念頭を離れざることを久しかりしが、一夜夢感によりて、天明早々、書庫を探查したるに、何の幸福か、禪師御眞筆の御自著傳を、古紙堆中に發見し得たるぞ嬉しき、實に眞金を、塵芥裡に拾得したるにも勝れり、今此御自著傳を拜覽するに及びて、從來の疑着、總に釋然たるを覺え、感涙轉た滂沱たるものありき、蓋禪師大寂定中より起ちて、親く之を授與し賜ひたるものか、按に此御自著傳は、禪師龍泰より我法華に御轉住遊ばさるゝの際、之を本寺總寧寺へ御提出相成りたる書類の控書なるべしと思はる、乃ち巻頭に掲げて後昆に貽す、法華元峰

瑞岡珍牛禪師御自著傳

時處法臘之事

肥後國天草郡下河內村產、姓藤原、佐藤茂兵衛三男、寬保三癸亥年正月六日誕生、寬延三庚午年四月八日、同州新休村東向寺靈泉長老薙髮、字珍牛、號瑞岡、同曆冬同州同郡同寺結制入衆、寶曆十二壬午春發足、掛錫東都芝青松寺、安永五年丙申年夏、於長州豐浦郡大坪村大雄寺湛蓋長老初會首座職領之、同曆七月廿八日、同州同郡長府入笑山寺亮天長老之室嗣法了畢、同曆六丁酉年三月十日、同州同郡永田村妙音寺へ晋山、同曆八年七月二十一日、越州永平寺轉衣、同八月十三日詣 闕綸旨頂戴、寬政己酉年正月十八日、肥後國天草郡山口村觀音院入院、同曆夏初結制興行、同曆八月十三日、同州同郡新休村東向

寺晋山、同曆二庚戌年八月十五日、祝國開堂、同曆七乙卯年九月二十一日、信州筑摩郡松本全久院晋山、享和元辛酉年八月十五日、濃州武儀郡關龍泰寺晋山、即日祝國開堂、當曆行年六十三、法臘五十七年、二相成申候、

右之通ニ御座候以上

濃州武儀郡關

文化貳乙丑年

龍泰寺印

五月十八日

珍牛花押

總寧寺

御役寮

序 言

一我が瑞岡珍牛禪師、本年己酉を以て、將に壹百回忌を迎へんとす、納等法孫、偶々此忌景に値ふ、何の幸か之に加へん、乃ち聊か法流の恩澤に報ひ奉らんと欲して、茲に本書の發刊を企てたり、
一禪師御一代の御事蹟に關しては、從來其傳世に傳はるもの多からず、美濃龍泰寺所藏の「龍泰寺三十二代瑞岡珍牛禪師傳」名古屋護國院所傳の「默宣和尚談話記」並に大正八年十月發行の「護法誌」上に高橋竹迷師の發表せられたる「洞上史傳瑞岡珍牛禪師」の三篇あるに據りて、僅に禪師面目の一斑を窺ふを得たるのみ、然れども、未だ其全豹を見る能はず、是に於て、禪師法縁の各位に依頼して、極力御事蹟の調査に努め、茲に最も有力なる好箇材料を得

たり、そは禪師が御生家佐藤氏に傳來する所の秘書是れなり、乃ち之を前三傳と對照參酌して、専ら其事實の真相を詳明せんことを期したりしに、而も禪師の幼少年、及び青年御時代の御事蹟に至つては、沓として未だ之を知る能はず、是に於て、亦天草東向寺高雲石龍老師を煩はして、佐藤老翁の直話を聽取し、且つ大中寺岡部萬中老師の高説を參酌し、之を年次に勘へて、茲に始めて禪師の面目を新にすることを得たり、更に禪師御事蹟の年次に至つては、御遺稿、其他の材料を參照して、之を排列したるに、往々時代に柄鑿ありて、之れが取捨案排に艱みたりしが、偶々禪師御眞筆の履歷書を、書庫中に發見し得るに至りて、百疑一解、茲に一段の新事蹟と眞面目とを公によることを得たるは、衲の最も喜びとする所なり、

一 禪師の御遺稿は、其の數篇を除くの外は、悉く是れ、衲が室内所傳、桃嶺和尚の淨寫に係るものなり、而して之れが編次に至つては、實に是れ岸澤惟安老師の指示を仰ぐ原本寫本なれば、誤字脱字あるを免れず、之を岸澤老師の補正を添えられたる外に、其當然の誤脱と認むべきものは、直に之を修補して、乃ち剗削に附したり

一 禪師の法系圖に就ては、青松寺佐藤鐵嶺額老師の高教を仰ぎ、且つ護國院單頭佐藤梅堂師並に龍泰寺五十嵐絕聖師等提供の材料に俟つ所多し

一 桃嶺和尚淨寫原本中の禪師開堂疏は、則ち分抄して附録として之を存し、且つ禪師に關する餘他の記事をも附録中に収めたり、亦是れ禪師面目の一斑を仰がんと、の微意のみ、就中佐藤家の秘

書は實に禪師研究の唯一最上の史料なり這回佐藤老翁の好意と東向老師の斡旋とによりて之を提供されたることは眞箇是れ天來の賜たらずんばあらず乃ち私するに忍びずして之を公にするものは亦史家の参考に資せんとしての婆心なり

一本書の刊行に際し大本山永平寺貫首猊下大本山總持寺貫首猊下各々題詞を賜ふ蓋し大寂定中破顔禁ずる無く報恩供養何者か之に加へん須らく尊重し恭敬し奉るべし

一本書成るに際し龍泰寺五十嵐絕聖老師より跋を賜ひ高橋竹迷師より出版上の注意を與へらる欣慰何物か是に如かん茲に謹て謝辭を述ぶ

一本書寫眞に就ては東向寺高雲石龍老師多大の盡力を辱りし茲に記して厚意を謝す

一本書の發刊に當り其の校正印刷に關する諸事は徒弟皆如具壽之を斡旋し速に其業を成すを得たり即ち其勞を多とし祖風宣揚を囑す

一本書の編纂に膺り尙多くの材料を蒐集すべきを思ふや切なるものありしも發刊期日逼迫せるが爲めに已む無く他日の補遺に譲りて一先づ之を締切りたり大方の諸彦之を諒せよ

一本書發行の事業に對し多大の同情と助力とを寄せられたる諸師の提供に係る材料並に芳名等は之を法華寺寶庫に收め永くこの勝縁を記念すべし

大正十年四月一日

法華元峰識す

瑞岡珍牛禪師目次

第一編 瑞岡珍牛禪師御小傳

- 一 御誕生と家系——豪傑の血脉祖先の德澤……………一枚
- 二 入沙彌と得度——天草東向寺御幼少時代……………一枚
- 三 遊方と研學——雲情水意御時代……………二枚
- 四 大悟立身と傳法長養——笑山寺亮天禪師御隨侍時代(上)……………二枚
- 五 首先晋院と綸旨頂戴——功山寺亮天禪師御隨侍時代……………三枚
- 六 錦衣結制と祝國開堂——天草觀音院並東向寺御住山時代……………四枚
- 七 師孝第一と化門展開——松本全久院院住御時代……………四枚
- 八 龍泰名刹の喬遷と亮天禪師の塔銘——美濃龍泰寺御

住山時代(上).....五枚

九永平本山に雲衲提撕と玄透禪師古規復古の補佐
全(下).....六枚

十浪華に先師の塔を拂ひ高祖行狀記を著述す——浪華
法華寺御住山時代(上).....七枚

十一法華經講説と行狀記發行——全(下).....八枚

十二下化衆生の活手段天下一介の雲水僧——江戸優遊
御時代(其ノ一).....九枚

十三奥州松前の遊化と家祖の展墓——全(其ノ二).....十枚

十四武陵の復古と諸侯の參叩——全(其ノ三).....十二枚

十五萬松の國請と古規の復興——尾州萬松寺御住山時
代(上).....十二枚

十六革弊論の著と示衆詩偈——全(下).....十四枚

十七光風霽月——慶雲軒御隱棲時代(上).....十六枚

十八遷化と國葬——全(中).....十七枚

十九慶雲軒の御開創と得法の弟子十哲——全(下).....十八枚

二十禪師の眞面目上——最勝の轉輪古規復興の御一生.....十九枚

二十一禪師の眞面目下——禪餘の風流詩書畫の三拍
子.....十九枚

第二編 瑞岡珍牛禪師御逸話

一御正忌よりも大きな木.....廿一枚

二如意.....廿一枚

二毀す豫備の陶器.....廿一枚

四裸躰で讀經回向する乎.....廿二枚

五永代橋畔の群靈……………廿二枚
 六芝居の幕引……………廿二枚
 七三界の導師俗輩に名を呼ばる……………廿三枚
 八内匠で造つて其坐間は……………廿三枚

第三編 瑞岡珍牛禪師御遺稿

○晋山開堂法語……………廿五枚
 ○上堂小參示衆……………三十枚
 ○香語……………三十四枚
 ○下炬……………三十九枚
 ○眞贊……………四十枚
 ○賀偈……………四十六枚
 ○題畫……………四十九枚

○詩偈……………五十三枚
 ○雜著……………五十六枚
 ○眞贊ノ二……………六十一枚
 ○題畫ノ二……………七十二枚

第四編 附 録

一 瑞岡珍牛禪師立身賀偈其他叢錄……………七十四枚
 一 瑞岡珍牛禪師開堂疏……………七十五枚
 一 萬松珍牛禪師下火……………七十九枚
 一 永平高祖行狀記錄……………八十枚
 一 海外亮天禪師錄……………八十一枚
 一 默室良要禪師錄……………八十五枚
 第五編 珍牛禪師御生家佐藤氏秘書……………八十八枚
 研究史料

一 功山寺芳翰	二 全久院亮天禪師芳翰ノ一
三 全久院亮天禪師芳翰ノ二	四 高峰師書翰
五 功山寺書翰	六 龍泰寺瑞岡禪師越山芳翰
七 定源寺孝關師書翰	八 大雄寺書翰
九 禹門師書翰	十 永源寺書翰
十一 默室師書翰	十二 珍牛禪師 <small>東奥ヨリ</small> 芳翰
十三 默室師書翰	十四 魯山和尚書翰
十五 大光院默室師書翰	十六 護國院書翰

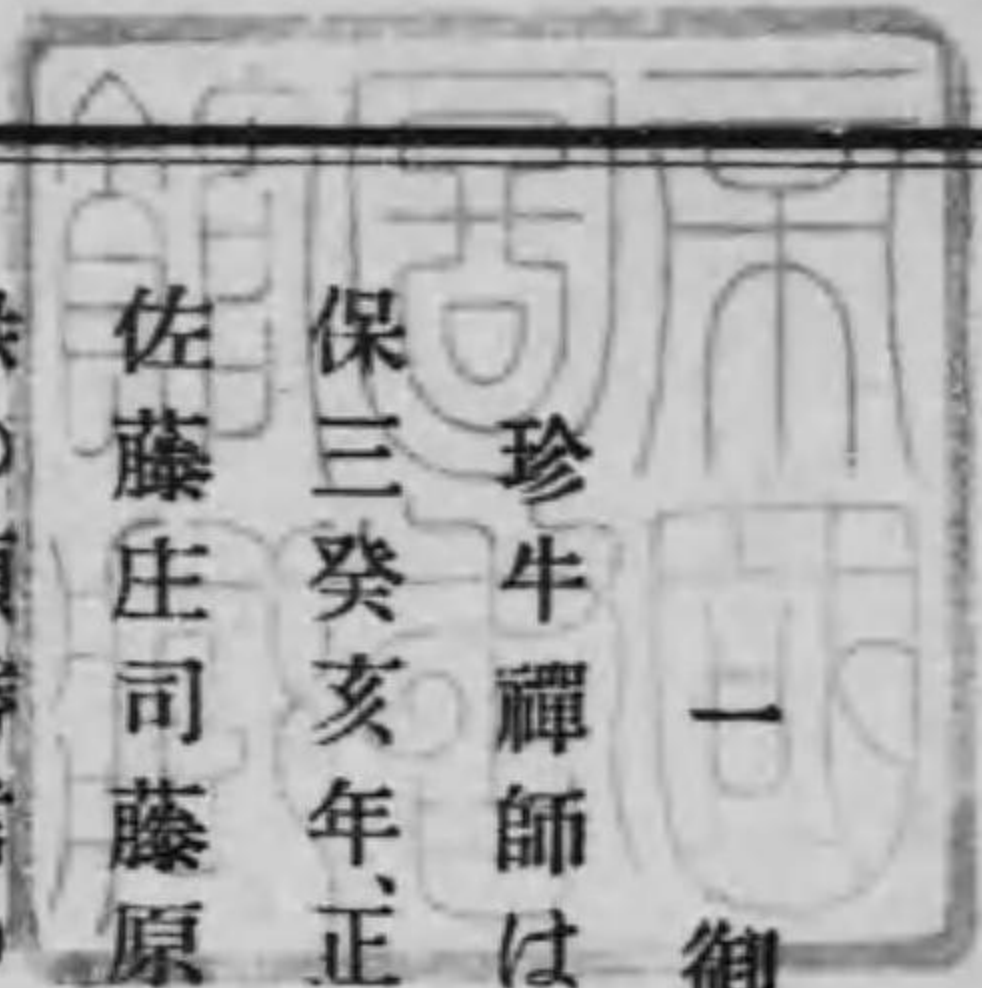
目次終

第一編 瑞岡珍牛禪師小傳

浪華法華禪寺第十八世法孫 苾芻 元峰 謹稿

一 御誕生と家系——豪傑の血脉祖先の德澤

珍牛禪師は、肥後天草の人、姓は藤原、瑞岡は其號なり、櫻町天皇寛保三癸亥年正月六日を以て生る、其先は奥州信夫郡佐和山の城主佐藤庄司藤原勝信後鳥羽天皇建久庚戌年八月八日歿す、源頼朝幕府をなす、文録の頃勝信の子次信五代の孫佐藤淡路守藤原家次、肥後國天草島に移つて之に居る、適々木山彈正木山彈正は城廓を本戸村に構へ、小西行長軍攻寄するに逢ひて、遂に戦歿せりと云ふに、に拔擢せられて、下河内及び本村を領じ、世々邑の長たり、正保年間、佐藤氏第四代彌兵衛、普門院を建立して施主となり、更に本戸村に明德寺を建設し、本村に東向寺を創立し、而して皆



其開基たり、佐藤氏第七代茂兵衛は、實に禪師の父と爲す、母は同郡下津村兒島氏、父夙に三寶を敬ひ、家を長子周藏に譲りて後、出家して聞喜と稱し、全國を行脚す、禪師の出家基く所有りと云ふべし。

二 入沙彌と得度——天草東向寺御幼少時代

禪師孩提に在つて、徒らに嬉戯せず、自ら出塵の操あり、延享二乙丑年、禪師甫めて三歳、一日乳母に伴はれて東向寺に詣づ、而して家に還り肯せず、父母其法器なるを知り、乳母をして禪師に隨伴せしめて、乃ち驅鳥の沙彌たらしむ。

桃園天皇寛延三庚午年四月八日禪師八歳、東向寺九世靈泉惠照和尚を禮して薙髮し、具足戒を受く。禪師天資英悟、三時の諷經傍より聽いて之を誦し、日常の行道、概ね見て之を倣ふ。况や豪傑の血、沸々として自ら脉管に鳴り、天縱の才、勃勃として乃ち縱横に溢る、經

書授くるに隨つて輒ち之を誦んじ、凡そ語るあれば、自ら玄理に協ふ、衆異とせざる莫し。父母其志を成さんことを願ひ、師僧克く策勵を加ふ、之を祐くるに天然の美、天草の洋を以てす、雲山渺茫たる處轉た俊爽の才を涵養す、水天鬢鬢の間、豈大魚の波間に跳る莫からんや。

三 遊方と研學——雲情水意御時代

禪師十四歳寶曆六年丙子年にして、初めて郷關を出で、錫を飛ばして遊方す。禪師少より畫を好む、其長崎に在るや、頻に畫事を學ぶ、父公之を聞き、其志を謬らんことを憂へて、特に往いて之を諭し、禪師を促して郷に歸らしむ、禪師歸ることを肯せずして曰く、予に所信あり、少時暇を賜へと、當時蓋し禪師は沈南瀕に師事せりと云ふ。其筑前太宰府に遊ぶや、府の觀世音寺に在つて、専ら戒學を修む、他日天台の

高僧豪潮律師は、實に當時研學の法友なりしと云へり、禪師遍參の時、到る處の叢林相見請問に則ち曰く、珍牛出で來る乞師一鞭と知らず、當時天下の宗匠、能く一鞭を與へし者果して幾人ぞ。

寶曆十二壬午年禪師二十歲の春、志を奮つて東遊し、江戸芝青松寺に掛錫す。時に珉峰秀國禪師住院せり、途に丹の永澤寺に到る、乃ち請問して曰く、承り聞く當山に活埋竅あり、是なりや否や、答話に曰く、是と、禪師座具を提起して曰く、什麼に因て這箇を餘し得たる」と、師家驚いて曰く、此小僧容易に侮り難しと。

四 大悟立身と傳法長養——笑山寺亮天禪師御隨侍時代

後桃園天皇安永二癸己年、禪師三十一歲、適々長州笑山寺に到り、海外亮天禪師に謁す、一見夙識の如し、即ち意を決して付隨し、朝夕侍奉懈らず、禪師從來寰宇の宗匠に參叩すと雖も、未だ知解を免れ

ず、是に於て亮天禪師、珍牛禪師をして趙州狗子の話に參ぜしむ、禪師平常、單々として箇話に參ずること最も孜々たり、一夜長坐不臥、只管に公案を拈提して、無々と呼ぶこと切なり、隣單の僧、其喧きに堪えず、以て自家の打眠を害するものと爲して、何れよりか大桶を持ち來り、禪師の頭上より之を蓋冠す、而も禪師は無念無想、只管に無々と連呼するのみ、偶々曉鐘の耳端に響くに至り、忽然として桶底脱却して、箇事を究明す、乃ち方丈に上つて所解を呈す。

四年丙申の夏、長州大雄禪刹、湛蓋長老初會、禪師を請じて首座とす。亮天禪師其罷參を賀して曰く、失却人間天上路、披毛戴角轉風流、大家無錯、名賓祝、隨處自在更勿休」と、國泰智外禪師賀偈に曰く、不喫三春水草生、被毛戴角檀名聲、人天盡力可難見、哮破大千威氣獐」と、同年七月二十八日、長府笑山寺亮天禪師の室に入つて嗣法し、遂に華

叟派下第二十八傳の祖師と爲る。此より以後、隨處に宴坐して、聖胎を長養し、猥りに世と接せず、獨道味を甘じ、以て自適せり。

此年七月三日、禪師の母逝去す、法名を蜜傳祖印大姊といふ、一子出家すれば九族天に生ず、禪師の母、陰中に禪師の衣鉢相續に遇ふ何の莊嚴功德か之に加へん。

五 首先晋院と繪旨頂戴——功山寺亮天禪師隨侍御時代

安永六年丁酉三月十日、長州妙音寺に晋山、正に禪師三十五歳にして、是れ禪師が首先住職なり。八年己亥七月二十一日、永平寺に瑞世し、同年八月十三日闕に詣りて繪旨を戴く。

光格天皇天明元年辛丑九月八日、禪師の父歿す、聞喜察善上座と稱す、禪師の母逝いてより恰も五年なり、蓋し此間、禪師屢々郷里に往來して、父母の墓を展し、因に東向寺に入つて、典座の職を執りし

と云ふ。未だ幾ならずして長州功山寺に到り、亮天老師に奉侍して功山寺普請の事業に幹旋せり、天明七年丁未十一月三日、功山寺亮天老師より佐藤周藏氏に贈られたる芳翰の一節に曰く、

志願普請之一件には、百事珍牛心遣被申候、右用事故、莫田僧飛錫被致候間、此地之様子、聞知可被下候、珍牛老僧に被相成、拙普請事故、諸方より寺も申參候得共、辭退申遣候、云々、

と、以て當時該普請に於ける珍牛禪師責任の重且つ大なりしを知るべし。蓋し其際功山寺に於ては、高峰和尚典座となり、堅光和尚侍者を勤め、而して珍牛禪師は副寺と爲り居たるなり。

六 錦衣結制と祝國開堂——天草觀音院並東向寺御住職時代

寛政元己酉年正月十八日、肥後國天草郡山口村觀音院へ入院、夏結制初會修行、同年八月十三日、同郡新休村東向寺へ晋山す、蓋し再

住牧仙幸牛和尚の後を襲いで、十三世の席を董し、錦を故郷に飾りたるなり、時正に禪師四十八歳、二年庚戌八月十五日、祝國開堂す、山水草木悉く雜僧時代の禪師を偲びて、瑞色殊に鮮かなり、此時亮天老師全久院に在り、即ち雲衲を派して、其化を助けしめらる。

寛政三辛亥年春二月、全久院亮天老師、濃州龍泰寺の内請待を受けらる、而して自ら老齡の故を以て、之を珍牛禪師に譲り給ふ、師恩廣大、慈悲海の如し、然れども禪師固く辭して未だ之を請けず、是れ亮天老師六十六歳の春にして、珍牛禪師は即ち四十九歳の時なり、禪師東向に住持たること、僅に四年にして、席を漢山道一禪師に譲り、遂に信州松本全久院に轉住せり。

七 師孝第一と化門展開——松本全久院御住山時代

珍牛禪師五十三歳、寛政七乙卯年七月、亮天老師其後席を珍牛禪

師に譲らんと欲して、其意頗る切なるものあり、佐藤家秘書高是れ
峰師書翰参照亮天老師、曩日福勝越後助化中、神僧の夢告に感じ、吉田氏の請を容れ、將に浪華法華寺に隱棲せんとし給ふなり、是に於て秋九月二十一日、遂に晋山補處せり、蓋し禪師が此行、逆轉に類せるも、其師命を重じ、師席を慕はれたる高風は、人々傳へ以て、禪師が師孝第一なるを讚歎せり。

按ずるに此時、禪師の化門應に旺なるべくして、史料の徵すべきなし、獨り享和壬戌の夏、信州耕雲助化中、拈香序語に曰く、予先松本城、寓居仙壽山下、咫尺隣居、交情可濃、雖然、薄緣未接、芝眉曾、仙方禪師、扣予於仙壽、告以建法幢之舉、在近、使予扶助之、誼予于時遊化、佗方不遇、然肯諾道已合、而未至其期、云々と、乃ち當時已に、禪師應化の事實あつて、而も之れが記録を失した

るなり。

寛政十二庚申年、十二月七日、海外亮天老師、浪華法華寺に於て示寂せらる。

八 龍泰名刹の喬遷と亮天先師の塔銘

美濃龍泰寺御住山時代（上）

享和改元辛酉の秋、禪師正に五十九歳にして、美濃龍泰名刹に喬遷、第三十三世の新住持として、方丈に南面す。苟も法を華叟下に繼ぐ者、其根本道場に視纂す、法悦何物か之に加へん、蓋し亮天先師の推舉、此に到つて實現せるなり、乃ち仲秋二十一日、開堂演法、第二回の懷香を拈じて、先師亮天老漢に供養す。堂々たる無極最初の法窟、天下の龍象、颯沓として此處に集り、四方包笠して至る者、幢々として絶えず、宗風孔だ熾に、法旆大に振ふ。

按ずるに禪師、曩に寛政三年、亮天老師の推舉を蒙り、龍泰晋院を促されたるも、辭して應ぜざりし者は、蓋し老師在し、侍奉怠らんことを恐れてなり、爾來十年、此に到つて應請するものは、先師既に寂し、荷負輕からざるを以てなり、此歳八月、先師海外亮天禪師の爲めに、碑を浪華に建て、法弟堅光師に命じて塔銘を作らしむ。

二年壬戌の夏、信州松本城下耕雲寺に助化す、蓋し宿債を償ひたるなり、當時に於ける香語、示衆、賀偈、眞贊等、多々御遺稿中に存せり、其半夏示衆に曰く、

九十刻期、今正中、無功用、處好詮功、越修超證、是何地、寶印當風、照已躬。

九 永平本山に雲衲提撕と玄透禪師古規復古の補佐

美濃龍泰寺御住山時代（下）

享和二年の秋、適々永平高祖承陽大師五百五十回の大遠忌に胥

値ふ、祖山の重興、玄透禪師、同聲相應じ、同氣懇請して曰く、

吾以天童之清規、勃興復古、爲念、故萬里求知、己牛老當代、人師、巨海舟筏也、豈非西家人、不知東家、丘麼、

と、珍牛禪師は、遂にこの法縁に隨喜すべく、龍泰寺を發錫し給ふ。

此時、宗門の兒孫、雲の如く屯り、承陽殿頭、大凡五萬人と稱す。大家名匠、花の如く羅り、珍牛禪師、獨り登龍門と稱せられ、問法參禪する者、斷えず、禪師乃ち警策して曰く、南來者三十棒、北來者三十棒、撞着牛老、觸破凡心、と、聲震宇に轟く。

遂に玄透禪師の依囑により、泉聲潺湲たる玲瓏巖下に、雲衲を提撕し、留錫三期にして、卓然として退藏す。宗門古規復古史上に、特抜の光彩を放つ者は、玄透禪師なりとす、而して其親交者中に、珍牛禪師ありしことも、亦大筆すべきなり、禪師他日萬松寺に入る、其尾州

一圓、則ち古規奉行の地たることを記臆せざるべからず。

十 浪華に先師の塔を拂ひ高祖行狀記を著述す——浪

華法華寺御住山時代 (上)

文化二乙丑年春、禪師六十三歳にして、浪華法華寺に住せらる、蓋し亮天先師滅後六星霜にして、其來つて日夕塔を拂はるゝ、亦是れ師孝の行持なり、禪師法華住山の最初より、高祖大師御行狀記を執筆し給ふ、按ずるに禪師、永平退錫の後、龍泰末年の頃より、高祖大師御行狀記の著述を志され、法華住山の前半期に於て、之れが目的を遂げ得られたるなり、即ち浪華の轉住は、一面より之を見れば、高祖御行狀記執筆の爲なりとも稱すべく、其祖德流布の大御誓願は、即ち下山の道は、是れ上山の道なるものか、其永平高祖行狀記末文に曰く、

吾高祖無作の徳業は、いかてか凡人のはかり知るべきや、されども、時のひとの顯に見、ひそかに聞きし、奇瑞のたうときを、後の世の人にも、知らせばやと、前に波多野氏が需めによりて、建斯和尚の記せられしが、委らなれども、風に草の偃迄におよばざるは、末の世につとめ易き法にあらざればなり。かゝる御法をば、今更に拙きうつし繪となし、將た眞假名もてしるしぬるを、智者達の閱て、老婆親切とあざみたまふ共、よしや賤手巻くり返し、祖恩の高き御徳を、四の海の隈々迄も、愚人とよもに仰ばやと、おもふあまりにこそ。

と、其行狀記全文、玉を綴りたるが如き大和文字、禪師面目の一斑を仰ぐべきなり。三年丙寅仲秋の和歌あり。
この夕へ秋のもなかの知られけり朗らくと月さえわたる

高祖行狀記は、文化五年戊辰の冬、稿成り、六年己己の夏發行、其後、文化十四丁丑八月寂室堅光師住山代に至つて、御行狀記板木を越州大本山に寄附し、弘通に資せられたり。板木寄附に對する永平寺下附書は附録に之を收む。

十一 法華經講説と行狀記發行——浪華法華寺御住山時代（下）

文化五戊辰年夏、珍牛禪師、浪華法華寺に在つて、法華經を講説し給ふ、蓋し浪華法華寺は、國分二寺の一聖武天皇天平十三年、諸國に命じて各國分寺を建立せしめ給ひ、次いで又國分尼寺を建立せしめらる、僧寺は金光明寺にして、僧二十人、尼寺は法華寺にして、尼十人を置く、浪華法華寺は即ち其一なり、而して其後荒廢せしを、至徳嘉慶の際了庵慧明禪師通幻禪師の嗣之を復興して、盛なれば、禪師天平の御宇、國分寺に法華經十部を備ふべきことを命じ給ひたるに基きて、此の講筵を開かれたるなり。法華開講の偈に曰く、

金口、親言妙法華、廣長舌相覆、河沙無安、三界居安樂、火裏蓮開、慈父家

同完講の偈に曰く、

常在靈山無上尊、圓音微妙演金口、秋聲萬里旻天、月誰謂收廣長舌根、
此年孟秋禪師信州に遊化し、暑を仁科氏の樓上に避けらる、與仁科居士偈三首あり、蓋し亦此地助化の次なり。戊辰除夜口號に曰く、
鳥飛兔走逐奔波、六十六年只麼過、行道都無能、一事假名深慚擬、僧伽、
同示衆に曰く、

紅顏白髮易蹉跎、誰羈際駒逐電過、此道不至安穩處、飯錢豈許老閻羅、
六年己巳歲朝祝聖に曰く、

至化誰量歸至仁、袈裟閑坐值令辰、普天率土仰恩澤、一辨心香祝一人、
同示衆に曰く、

濁富漫誇不守貧、法華林中舊家珍、无邊寶藏歸吾有、塵點壽量劫外春、
此夏五月、權中納言經豊公、禪師御著、永平高祖行狀記の序文を撰せ

らる即ち此歳行狀記を發行せるなり。按ずるに珍牛禪師法華住山以前は、高弟禹門師監寺となり、而して禪師在院當時は、法嗣默室師常に記室に侍したるが如し。

十二 下化衆生の活手段 天下一介の雲水僧——江戸優遊御時代 (其ノ一)

名藍大刹の龍泰寺を去り、溪聲山色、自ら生身の宗祖古佛に相見すべき吉祥山を下り、永平高祖の德澤を流布すべき行狀記を、浪華法華寺に書き畢られたる珍牛禪師は、更に下化衆生の活手段を弄すべく、其卓爾たる雄姿を、黃塵萬丈の江戸繁華の巷に現はされたり、時正に文化七庚午年、禪師芳齒六十八歳の春なり、天下一介の雲衲として、洒然、脫然、迥然たりしものあり、禪師江戸優遊の活三昧は最も奇抜なりき、禪師が逸話の大半は、多くは此の間に傳へられた

り芝居の幕引をしたりと云ひ、或は蝦夷松前に渡りて魚舖に庖丁を振ひたりといふ、悉く皆菩薩の遊戲神通也、寄七十一夢、偈に曰く七十餘年一眠春、去來爲主、又爲賓、東西南北在何定、鐵錫杖邊遊戲新同偈に又曰く、

扶桑東海間、蹤跡雲外崢嶸、八嶺重白雪、四時千萬丈、青天映出玉芙蓉、按ずるに、珍牛禪師江戸遊化の錫を飛ばさるゝや、禪師の法嗣隨徒、概ね跡を追ひて江戸に出で、禪師を景仰せり、禪師の最高弟と傳ふる禹門師、癸酉正月の芳翰に曰く、

辨玉和尚禪師の法嗣も、市ヶ谷洞雲寺と申ニ住職致し候、寺中に法嗣十哲中、有之、老師御休息被成居候、默室和尚法嗣十哲中も、武州永源寺と申に住山、當夏者結制に候、去十一月四日此地大地震、大地一尺斗割れ候、拙寺之庫裡客殿大破致、當春は早速大旦公阿波守殿より

普請有之筈に候、云々

と、禹門師は當時戸塚盛徳寺に住持たり、又大雄寺肥後より、癸酉正月の書簡に曰く、

珍牛老古佛にも、江戸御滞留、去九月出の尊書相届、拜見仕候處市ヶ谷洞雲寺と申へ、辨玉和尚當春御晋山ニ而、隱居様には去冬より御入込、尤本堂之後口ニ隱寮も有之様子、亮璘長老法嗣十哲中の末弟に禪師御在世中常在、由愈江戸御逗留に相定り、大阪へは御歸隱無之御様子申來候、至極御達者、當春杯戒師に三所より御請待共御座候、而至極御繁昌の由申來候、

と、以て禪師江戸優遊中の御消息を明にするを得べく、即ち禪師の御遊化は、徒らに出没定りなき放浪生活にあらざりしを知るなり

十三 奥州松前の遊化と家祖の展墓——江戸優遊

御時代 (其ノ二)

珍牛禪師江戸に出てられてより、茲に滿三年、乃ち文化十年癸酉の春、老齡七十一歳にして、遠く奥州松前に遊化し給ふ、是れ抑も亦何が爲ぞや、之を佐藤家の秘書に徵するに、癸酉正月二十七日禹門師の芳翰に曰く、

隱居も當夏は松前に。結制助化。ニ被招來。二月廿一日江戸發足。ニ而可被參。筈ニ候。江戸より松前迄貳百貳拾壹里有之老躰。故遠路之處氣遣ニ候得共兼而吳々思召有之候故。御留メ不申候。伴僧ニ者亮璘參候其外隨伴之者十人許參筈ニ候

と、然れども兼而吳々思召有之候故とは、亦これ何を意味せるか、此年八月、永源寺默室師の芳翰に曰く、

於當地、隱居老人、御安泰ニ御座候所、當春者、奥州松前より江湖ニ請招有之、三ヶ寺之内大中寺様ハ、法類之事ニ御座候得者被罷下此節殊、外大はやり、此地よりも追々隨身之もの罷下、當冬も無據滞留之趣申來、戒會江湖山の如く、たのみ有之様子、老後之樂みの様に申來、拙僧共悦罷在候。

と、實に法悦至極なりとす、然れども未だ其奥州遊化の眞意を知る能はず。

翌十一年甲戌の秋七月、珍牛禪師奥州より江戸に歸還あらせらる、文化甲戌七月六日、禪師佐藤家に贈られたる芳翰に曰く、

久シ振ニ其地之音書到來、因審、一門中都來無別儀、子々孫々、繁榮可申之趣、於老衲甚以慰老情候、去年中は、老衲も東奥松前迄遊化諸所結縁多、是亦老後之愈懷、珍敷事共多見物致候。中略扱於奥州信

夫郡佐和山之城は、佐藤庄司勝信之本城與、于今城跡嚴然と有之候、菩提寺は醫王山と申し、法號と縁起と贈り進候、法號は表具被成候而可然、兩家ニ一枚宛可頂納被成候。

一東向開山之始、其地ニ御落着之處は、普門院ニ御座候、其家施主家ニ有之候故、其時最も諸事御世話申上候義ニ候、夫レより

東向、明德御建立被遊候、其趣意よく、御勘考被成候而、諸事御守護可然、此事も貴家ニ而特と御教示被成置、兒孫迄被申傳有之度事ニ候、老情難盡筆端事而已、遠察被成候、以上

と、則ち知る、禪師奥州御遊化の眞實目的は、彼にあらずして此にありしことを、世禪師の師孝第一を稱す、豈知らんや、其父祖に於ても亦孝行第一なることを、禪師他日、黃泉禪師の忠を祖庭に竭すを稱す、而して禪師の御生涯は、全く祖庭に忠なるものなり、忠臣は孝子

の門に出づと、古人豈我を欺かんや。

十四 武陵の復古と諸侯の參叩——江戸優遊御時代(其ノ三)

珍牛禪師、奥州より江戸に歸還し給ふてより、化門益々旺盛を極む、是時に當つて、駒込旃檀林吉祥名刹は、新に雲堂を創設し、聚會一萬指と稱す、是に於て珍牛禪師を請じて師家と爲し衆を統せしむ、禪師純ら天童の範模に範り、大に元祖の準典を興す、是れ武陵復古の濫觴なり、禪師堂頭仙州禪師の命を傳へて、清涼堅光師をして僧堂記を作らしむ、乃ち文政丁丑五月、堅光師僧堂記を撰し、辛巳の夏、鳳林禪智師之を書せり、蓋し宗門文學中の逸品たりと云ふ、此れより珍牛禪師の名天下に鳴り、遠近益々徳光を仰ぐ、諸侯の參叩する者踵を接き、禮を以て請せんと欲する者、亦鮮からず。

十五 萬松の國請と古規の復興——尾州萬松寺御住

山時代(上)

仁孝天皇文化十四丁丑年夏五月尾州侯天慈院懇請して珍牛禪師を迎へ、龜岳山萬松寺に住せしむ。禪師招に應じ、八月十九日を以て進院開堂す。蓋し古規の復興を計り給ふなり。國帖に曰く。

今茲文化丁丑、吾殖福場、龜嶽山萬松寺、虛席於是乎。請前龍泰瑞岡珍牛禪師補處本寺、爲國開堂演法。右蜜以。

倡道行規、須是蘊美哲匠、擢才護教、必憑擅名賢明。方外今乏、倡道之師、海內孰爲護教之任。曇華易覩、知識難逢。伏惟新命珍牛和尚、應世才優、慕古志粹、明珠不避濁水、遇緣卽宗。達士豈守一隅、隨處爲主。勿謂高風、叵延屈欲、爲末流作著龜時哉。瑞氣連蓬萊、祥雲擁紫極、鯨鳴鼉吼、歸然紺園、改觀虎踞、龍蟠、鬱乎金城、逾固力提綱要、丕壽國家。八月十九日齊朝御花押。

寂室堅光師同門疏に曰く。

同門白眉、瑞岡牛兄大和尚、居濃之龍泰、全盛而怙退、於世若遺、自爾不擇花夷、行化諸方、亦殆乎十餘年。文化丁丑秋八月、應大檀越張州大藩鎮黃門源侯之懇請、舛往龜岳山萬松禪寺。且有寵命、專作興禪苑。古規於宗教最爲重、義不可辭讓。因消吉日、祝國開堂、法族之慶莫大焉。緝詞謹裁、襍線之疏、以表暇悃云。右伏惟。

曩昔惟慧定老、應請輿望、曾住此山。而今瑞岡牛兄、榮中公、選視篆本寺、蓋機之相感矣。寔理斯令然矣。似貽孫謀於往時、足觀祖業於今日。蜜惟新命萬松瑞岡牛兄大和尚禪師、當機絕待、妙用應緣。瓜瓞綿々、高拔宗族之花、棣萼鞞々、獨奪萬爽之才。金錫風生、入蝦夷雲、青鞋猘健、步武野月、撲碎諸方、瑠璃盤拋擲自家、草皮囊與其戲弄、大千混迹、於塵途孰若主張正法、定鼎於祖域、摧邪論追妙喜、輔教篇慕仲靈、躬

當益壯老當益堅過人也遠如說而行如法而住舍師其誰天道好還
人心有竣宜想輔車相依之誼庶見蕩壘相和之情伏冀
嵩祝後天聖圖以副先師重寄幻住湖東清涼愚弟寂室堅光等九拜
謹疏。

と以て禪師の重任を知るべきなり緇白雲の如く従ひて會下に聚
り徳風草の偃すに似て四方に扇ぐ珍牛禪師の名之より更に高し
其提綱に曰く。

第一義諦無上妙道非言語及非情識到非修證得非色非心非有非
無非因果法是諸佛之本源行菩薩道之根本大衆諸佛子之根本也
須知處々是道場莊嚴備足時々卽法輪旋轉無礙然毫釐者差天地
懸隔忽起我念曠劫苦因沈倫無窮出身無期若不然而覺苦可厭了
樂可求纔念施戒悲智頓發則慧日麗性空癡暗揚祥光雖然與麼自

非有轉步劫外撒手那邊底手脚爭得到恁麼田地一拂良久云
音妙木人塗毒鼓調高石女沒絃琴。

と詢に是れ諸佛無上の妙道第一義諦の綱要を提示して眞言實語
し給ふ參立誰れか徹惛徹隨せざらんや時に禪師正に七十五歳。

萬松林下魚板頓に響を改め門風茲に大に振ふ國君平生法要を
諮詢し或は參駕禪談晷を移す未だ幾ならずして庫院を再建し七
寶塔を建立せらる壯麗天下稀に見る所咸く是れ禪師發心唱導の
力國君明德光被の致す所なり規矩儼然として初めて高祖道の復
興を見る道俗齊しく隨喜の涙に咽びたり。

或は云ふ禪師の萬松晋院を促したる者は豪潮律師の力なりと
蓋し律師常に名古屋城外に在つて往來說法す尾州侯の歸依最も
厚し律師幼より禪師と好し乃ち侯の爲めに頻に禪師の人となり

を説く、適々萬松住持其人を得ず、荒顔殊に甚し、律師侯に説いて曰く、此時に當りて之を興すものは、珍牛禪師を措いて他に求むべからずと、侯の心大に動く、禪師亦窃に律師の友情に感じ、是に於て錫を金鯨城下に留めらるゝに至れり、これより同道唱和して、大に佛法を舉揚せられ、二師の名、今猶ほ尾濃の地に信敬せらる。

十六 革弊論の著と示衆詩偈——尾州萬松寺御住山
時代(下)

珍牛禪師、實に古規の復興を以て、終生の業と爲し給ふ、其の永平に立透禪師を補佐せられたる、浪華に行狀記を著述せられたる、禪苑清規を吉祥に唱道せられ、高祖道を萬松に復興せられたる、悉く皆慕古の行持に非る莫し、是に於てか、禪師「革弊論」の著あり、大要毘尼を引證して、袈裟の體相を説得せらる、以て難を辯じ邪を辟かる

ゝなり、蓋し志を亮天師に繼がれたるなり、亮天先師は、機鋒高邁、永平立透禪師の古規を奨勵して、木魚を焼却せるや、以て人我を増長する者と爲して之を痛責せらる、然れども其志す所は則ち同じ、所謂南に向つて北晨を見せしむる者か。

禪師萬松に在つて、法輪を轉ぜらるゝこと、實に旋轉無礙なり、恰も象王の行くが如く、活如來の現じ給ふに似たり、而して此間に於ける、禪師の示衆、語録の存するもの最も多し、蓋し桃嶺師、常に側に侍して、之れを筆録せるに依るか、丁丑冬開爐上堂に曰く。

因緣時節火爐開、三世諸佛稱善哉、說法摩訶般若、焰、虛空拍、手、躍、寒、灰、と、丁丑臘月佛成道獻粥香語に曰く。

尼連河上、牧娘兒、滿鼎炊、成、珍、乳、糜、多、劫、苦、辛、忘、零、落、人、天、景、仰、等、爲、師、文政元戊寅年、禪師七十六歲、乃ち戊寅元旦の作あり。

雪花垂竹絕風塵窓外何知物色新時向金鷄東海曉喚回萬國一天春
七十六齡牛懶書と署せられたる眞蹟あり岸澤惟安老師の所藏
なり管聞釋迦佛先受然燈記然燈與釋迦只論前後智前後體非殊異
中無有異一佛一切佛心是如來地と詢に尊き御示なり更に戊寅仲
冬俱胝和尚豪德晋院の賀偈等あり御遺稿中に載せたり。

二年己卯禪師七十七歳なり己卯立春肖像手題に曰く。

無相之相片雲擬空爲雲爲雨悲願何窮

と此外己卯歳旦の偈大聖佛母準提懺法の跋仲秋既望與橋完平書
等あり並に御遺稿中に之を收めたり己卯冬達磨忌に曰く。

夙捨最尊無價珍放身苦海度沈淪悲心蓋覆遍沙界耻以單傳說我人

噴 一辨心香恩未報埋霜殘菊吐芳新

己卯十一月六日冬至上堂垂示に曰く。

寒暑到來無地迴避衲僧家自有通天活路諸仁者還有到此間者麼試
進步來看提綱に曰く。

群陰剝盡時小人行路斷一陽來復地君王載仁澤大道無私天運合節
求成而無得無爲而自成雖然與廣莫蹶倒遷謝境退墮玄沙場良久
云 脫穀烏龜跳天去摧殘枯木發嫩芽

三年庚辰禪師七十八歳七十八翁牛瑞岡書と署せる達磨大師贊
あり曰く外見諸緣內心無喘心如墻壁可以入道

寓尾之萬松林下七十八翁牛懶野書以與桃嶺具壽の偈あり即曰く
法本法無法無法々亦法今付無法時法々何曾法

と是れ禪師が附囑なり他日桃嶺師に難産一喝の逸話あり蓋し禪
師の附囑を護持せられたるものか。

珍牛禪師萬松に匡領せらるゝこと前後三年山門の面目茲に一

新し問法參禪、至る者蠆聚し、叢林の盛なること、天下に冠たるものありしが、禪師年老已に應接に艱み、席を黃泉禪師譲りて、卓然退藏せらる、退藏萬松阿蘭若、上堂法語あり、其垂示に曰く。

道非有言、非無言、脫體現成、居非有住、非無住、廣博善住、是名平等性智、是名無上法門、若有箇人、試進步、提綱に乃ち曰く。

老身清世渥承恩、感戴斯文茲尙存、雲霧天涯消碧落、瞻光夜闌徹幽昏、漂沈苦海浮船筏、迷悟險途拓法門、謹白後來賢聖子、如來常在箇紺園、此是奉重道場誘導後昆底之醜婆情、即今如行藏合時、妙用臨機、又如何、良久云。

曾倚虛空打窟籠、又轉窟籠作虛空、虛空窟籠大無二、縱橫妙用大圓通

十七 光 風 霽 月 —— 慶雲軒御隱棲時代

文政四辛巳年、禪師七十九歳なり、珍牛禪師の萬松を退藏せらる

るや、尾陽君公、綠樹重陰、乃ち慶雲軒を爲つて、迎へて之に居らしむ軒は尾陽公天慈院の父君、章善院の隱邸なり、布池に在り、今の護國院是れなり、此年正月十三日、隨徒魯山和尚の書翰に曰く。

陳ハ去年滯在中ハ毎度御懇意ニ被成下、殊更發錫之砌ハ、御饞別且夜中御送別被下、萬々忝奉謝候、中拙生も海陸無異、此地へ着到牛老古佛隱居所へ隨侍罷在候、御隱居所も、普請出來、逐々二月末ニハ、御移居之筈ニ、御座候、唯今之處ハ、暫時之假居ニ、御座候、隨分御壯健ニ起居被遊候、間御安意可被成候、御約束申上候、老和尚之畫、此節相贈度候得共、取込罷在、不得其便、再便送り上可申候間、右様御承知可被下候、中略尙々 老古佛隱棲ハ、先君公御下屋ニ而、御菩提所建中寺前と申所ニ御座候。

と禪師此中に燕居し、一ら禪悅を味ひ、或は風月を友として餘生を

送らる、蓋し此間に於ける御眞蹟も、亦少なからざるべし、呈龜岳林丈室の偈に曰く。

萬松高秀幾千尋、積翠飛來落客襟、何但龍華三會曉、威音劫外舊知音

十八 遷化と國葬——同(中)

文政五年壬午初春、正法眼藏涉典續貂序を撰せらる、當年禪師正に八十歳、公命を下して、祝賀の慶事を行はしめらる、乃ち潤月二十四五六の三日に亘りて之を行ひたるに、其賀筵の殷盛なること善美を極む、實に當國開國以來の盛榮と稱せり、偶々二月初に至りて老病忽ち四大を犯し、病症甚だ重態なり、禪師自ら起つ能はざるを、知り、徒を召して後事を囑し、懇ろに遺誠し給ふ、君公手醫を遣はして、秘藥を投ぜしめらるゝも、其効を奏すること能はず、遂に四月十日に至りて、禪師其の末後の迫れるを告げ給ひて、沐浴淨衣を着け

偈を留めて衆に別れ給ひ、乃ち端坐して寂を示し給ふ、偈に曰く。

八十年前、一小童、是誰、能作八旬翁、無初中後、初中後物外、乾坤示異同、と、禪師即ち行年八十にして、佛と壽を同うし給ふ、五月十日、乃ち君命を以て本葬を行ひ、茶毘して慶雲軒に塔し、靈骨を分つて之を八所に瘞む、萬松黃泉禪師、實に其秉炬師たり、禪師の寂を示し給ふや、國內の道俗、哀傷すること、恰も考妣を喪へるが如し、國葬の日、遠近の緇素、葬列の群集場に溢れ途を埋む、其幾千萬なるを知らず、稱し以て前代未聞と爲せり、無著黃泉禪師下火に曰く。

五字分明、山下牛不侵、苗稼去優悠、回途唯念水兼草、誰道天明把鼻頭、伏惟。

新般涅槃前永平萬松二十四世瑞岡珍牛大和尚禪師、驛且有角、白却現、探向祖庭、事耕種、任躬、鞭輔爲人天、拽犁耜、竭力田疇、或臥桃林野、或

伴函谷遊吐舌而喘翊宰相之曲調燎尾而戰破魔軍之陰謀五圖徒模
樣十頌未定酬庖丁不能窺過橋之尾巴寧戚焉得謠入海之蹤田於戲
雪山香餌無滓穢陝府鐵質絕去留箇是老人八十年間四蹄兩角倒臥
橫眠之異類三昧也這回轉步那邊千聖外回程無作火中遊豈待山僧
之叱咤雖然若不叩角歌爭得報舐犢之懋且道向那檀越家欄裡得聞
他末後一聲之牟良久云隴雲耕罷晴還雨勿怪村童牧不收

十九 慶雲軒の御開創と得法の弟子十哲——全(下)

珍牛禪師示寂に先ち嗣資默室に囑して後事を司らしめ給ふ是
に到つて默室師其席を繼いで第二祖となり慶雲軒を起し叢席を
展開するを以て念と爲す然れども苦辛經營四圍の状況の爲めに
距まれて未だ果さずして寂す天保四年壽九十九時大方和尚亦禪師の嫡嗣
なり大に其志を繼ぎ第三世となりて奔走殊に力む志漸く達し事

遂に成りて軒を改めて寺と爲し清久寺と公稱するに至れり而し
て今の護國院は嘉永初年の改稱なりと云ふ亦禪師の餘徳と云ふ
べきなり而して珍牛禪師は實に其開闢開山第一鼻祖たり

美濃稻葉郡岩田村林陽寺は龍泰寺の末寺なり享和元年禪師龍
泰晋院の年を以て亦禪師を請して傳法開山となす

得法の神足十哲あり珍牛禪師法系圖に示すが如し各々門戸を
旺にす皆是れ佛氏の棟梁なり

二十 禪師の眞面目上——最勝の轉輪古規復興の御
一生

瑞岡珍牛禪師は絶世の雋傑なり瓜瓞綿々英傑の血を傳へて宗
族の花を抜き棣萼韜々俊爽の才を懐いて天下の門を叩き修行精
勵機鋒銳邁諸方の瑠璃盃を撲碎し自家の革皮囊を抛擲し胸萬有

を空じ、眼十方に綻び、而して彩を鐘めて、韜光し、美を蓋んで、晦跡すること、十有餘年、其世に應じ、教を輔くるに至つては、靈機轉々、法眼圓明、禪苑を復古して、規を天童に則り、正法を主張して、鼎を祖域に定め、行あり、藏あり、諸方に貶剝し、一弛一張、數剝に歷住し、祖水を永平の谿に汲み、慈船に浪華の流に棹し、金錫風生じて、蝦夷の雲に入り、青鞋狐健にして、武野の月に歩し、或は西海の郷刹に衣錦し、或は東海の法窟に應請し、縁に隨ひ、感に赴いて、最勝の輪を轉ず、詢に是れ、禪林の典型にして、法門の領袖なり。

二十一 禪師の眞面目下——禪餘の風流、詩書畫の三

拍子

然り而して、邪を破するの論妙喜を追ひ、教を輔くるの篇仲靈を慕ひ、懸河の慧辨を震ひて、跨竈の雄名を擅にす、加旃ならず、智悲兩

端、機朱紫を接し、遊戲三昧、才丹青に溢る、謂つべし、禪餘妙に瑜伽の蘊を探り、筆下巧に畫圖の癖に戯ると、誰か想はん、他の耽々たる虎視諸方の狐兔蹤を潜め、鏗々たる獅絃、闔國の琴瑟響を収むる底の珍牛禪師にして、箇の禪餘の風流あることを。

然れども、禪師の風流は、獨り此の畫のみに非ざるなり、其高逸なる書風と、富瞻なる文藻とは、當に其靈妙なる畫致と共に、亦禪師の面目を仰ぐべきなり、禪師の畫の漂逸靈妙なるは、其境涯を想ふべく、禪師の詩の餘韻嫋々たるは、其德風を仰ぐべく、禪師の書の雅古秀潤なるは、其人格を欽すべし、詩書と畫と、三拍子を兼ねるもの、蓋し宗門窄に見る所、而して之を貫くものは、其禪機なり、世禪師の畫を知るも、而も未だ禪師の詩と書とを知らず、蓋し其畫却て詩と書とを掩へるなり、然りと雖も、禪師の眞面目を知らんと欲せば、則ち

先づ其詩と書とを知らざるべからず。

今や、偶々瑞岡珍牛禪師壹百回の諱景に値遇し奉り、茲に謹で禪師の遺稿を編輯し奉り、併て禪師の眞筆を複寫し奉り、而して更に禪師の化跡を詳述し奉ることを得たるは、正に是れ禪師大寂定中慈鑑の照し給ふ所、而して遠孫報恩供養、至誠の仰ぎ奉る所なり。

大正十年辛酉孟春二月十日

第二編 瑞岡珍牛禪師逸話

法孫苾芻 法華元峰謹編

一 御正忌よりも大きな木

天草東向寺の御開山忌は、毎年九月二十日より、二十一日へ懸けて行はるゝ例となつて居るが、昔時は極めて町重に、且つ盛大に行はれたのであつた、珍牛禪師が、未だ小僧さんであつた頃の事なりけん、一日御開山忌の置物にと、荷持を従へて、一里餘りなる本渡町へと行かれたるに、中途に當りて木戸村といふむらがある、その村の路傍に、眞宗大谷派の延慶寺と云ふ寺あり、其寺の近傍のことなりとかや、人ありて問ふて曰く「小僧さん何處に行き給ふや」と禪師答へて「開御山忌の買物に行くなり」と彼の人戯れて「御開山忌とは何

程の木なりや」と問ひければ、禪師即座に「御正忌よりはウント大きな木なり」と答へられしとぞ（真宗にては、御開山忌の事を御正忌と云へりとなん）

二 如意

珍牛禪師、御幼少の頃の事なりけん、何事か過失ありけるにや、師の坊大に怒りて、如意法師の持を以つて禪師を打着して宣く。

「痛いか」

と、禪師問髪を容れず應へて曰く。

ヒヨイと出て、ニヨ井と曲つたものなれど、打たれて見れば、イタイものなり。

三 毀す豫備の陶器

珍牛禪師、東向寺十二世、超宗、越學和尚の時に、典座の職を勤められ

最も羈絆の身にあるを以て、道心とせられたり、超宗和尚、性極めて短氣なり、怒れば必ず器物を放擲する癖あり、茶飯の具、概ねその全きを得るもの稀なり、和尚一日、典座寮に入るに、種々の陶器、積みて山の如し、怪みて之を問へば、珍牛禪師、平然として答へて曰く、和尚平生、能く器物を放擲し玉ふ、衲等の迷惑、一方ならず、聊か豫備の爲めに、之を求めたるなりと、和尚苦笑して去る、これより其の癖、頓に止みしと云ふ。

四 裸體で讀經回向する乎

珍牛禪師は耕雲種月、慕古の大宗匠なり、當時宗門の多くが、明朝風に倣ひて、世間用と稱する一種の弊風、瀰漫し、爲めに、古來の宗風を滅却せんことを慨きて、専ら古規復興せんことを計られたるも、事容易に成るに至らず、漸にして、尾張一國のみは、之を古規に復する

の功を奏せられしと云ふ、斯かる弊風を掃ひて、之を正儀に歸せしめんと努められたるものが、即ち其著革弊論なり、書中反對者の説を反駁されたる面白き問答あり、反對者曰く「諸寺院中多くの祖師木像等は、袈裟に環及び総をつけてあるなり、今其の祖師の像に對して、古規用の袈裟を搭くるは非禮ならずや」と、禪師之を駁して曰く「誕生佛は裸躰なり、今此の裸躰佛に對して裸體で讀經回向する乎」。

五 芝居の幕引

珍牛禪師、江戸旃檀林に、捧喝を行ぜらるゝこと數年なり、一時何故なりけん、在俗の身と化して、芝居の幕引を勤めらる、曩に文化四年八月十四日、江戸深川八幡祭禮の際、群衆雜踏のため、永代橋墜落して、溺死する者數を知らず、傳へ聞く、當時橋の落ちたるを知らざる

群衆は後からも後からも押寄せて前方の群衆を押し落とし押し落して、停止する所を知らざる有様なり、前なる人々の、それと氣付きたる頃は、最早其身は水底の藻屑と化せんとする時なり、生ながら阿鼻地獄に陥り、現のあたり叫喚を見るの悲惨事なり、偶々群衆中に一人の士族あり、橋の落ちたるに氣着くや、忽ち白刃を縦横に振り翳して、二三人を切りつく、群衆は其を人殺しなりと爲して、怖れて後方へ退却したれば、漸くにして助かるを得たりと云ふ、其の後夜々鬼火出て、往來怖れを懷くこと甚し、依りて諸宗の僧衆、河畔に於て追善するも、依然として鬼火止まず、禪師同輩に語つて曰く、俗僧の輩何の爲す所あらんと、同輩曰く、貴公何の用をか爲すやと、禪師曰く、我れ回向せば、亡靈悉皆成佛せんと、聞く者皆之を笑へり、禪師一夜、河畔に到りて、芝居用の拍子木を一下して曰く、夫れ幕が

開いたぞと、鬼火忽ち消滅して、再び出てざりしと云ふ。

六 三界の大導師俗輩に名を呼ばる

珍牛禪師は、禪餘の風流、最も書畫に巧なり、或る人物誌に曰く「珍牛尾張の僧、畫に巧みなりと、法弟默室禪師之を見て喟然として嘆じて曰く「嗚呼我が師兄、徒に畫筆を弄せられしがために三界の導師の尊きを以て却て却て俗人輩をして珍牛とその名を呼ばしむ、今より以後、我が法門の弟子、斷じて畫を學ぶこと勿れ」と、誠められたり、亦これ叢林の一佳話なり、蓋し禪師の畫は、正に菩薩の遊戲神通にして、其高逸なる畫風は自ら人をして凡心を一轉せしむるの概あり、其羅漢を畫き、達磨を畫き、普化を畫き、寒山を畫けるを見るに、何れか佛法舉揚の大事ならざる、況や高祖大師行狀記の圖繪の如き、祖德流布の大佛事なり、誰かその高風を欽仰せざらんや、篤實なる默

室禪師の嘆の如きは、或は草を撲つて蛇を驚かすの手段、偶々擧に倣ふ痴漢を誡められたるものか、しかも珍牛禪師は、宗門畫僧として、十指中の一人たり。

七 内匠で造つて其の坐間は

珍牛禪師、萬松寺を退かるゝの前年、法嗣桃嶺和尚に偈を與へて、附囑して曰く、今附無法時、法々何曾法と、桃嶺和尚、附囑を護持して、無法の法を受用すること多年、其尾州雲太寺に住持たるの日、門前の一婦人、難産にて頗る艱めるあり、和尚乃ち柱杖を携へて到り、産婦に對つて曰く、内匠で造つてその坐間は、どうぢやと柱杖一下せられければ、忽然として出産したりと云ふ。

第三編 瑞岡珍牛禪師御遺稿

法孫 苾芻 法華元峰 謹編

晉山開堂法語

祥雲山龍泰寺晉山開堂語錄

享和萬年元中秋二十一日、濃州關 敕賜祥雲山龍泰護國禪刹晉寺開堂。

晉山

山門 跨天門戶、解脫大路、佛來祖來、好隨後步。

掛塔 無極最初是個山、絕巔雲鎖、絕躋攀、爽涼扶我、純金錫塔在那邊、一七間。

佛殿 取吉祥、辰入吉祥、門接吉祥、賓禮吉祥、尊。

元作「魏々堂々萬德抱擁天上人間、
誰不宗奉」清書之後、改書「今偈」也、

伽藍 諸鷲峰、囑護法安人、石銷芥盡、神威加新、
祖堂 西乾東土、驢頷馬腮、淨躑躅地、逆風揚塵、
開山 家傳青氈、東引西牽、要看鴻業、祥嶺峙天、
檀越 蔽芾棠蔭、果實秋深、千城祖域、餘烈猶涼、
眎篆 鈍置鐵牛機、住破誰敢管、直下自當風、一啄剖玉卵、
據室 天高月清、爽氣涵秋、百穀豐登、好當藏取、

開堂

拈衣 嶺頭閑不徹、藏醜吉祥雲、真哉提不起、拈云、拈起重七觔、
敕黃 烏篆兔隸、鳳翔鸞沖、錦藻耀彩、寶印當空、
山門 五家底話、說得神品、瑞彩雲興、滿堂曬錦、

同門 封殼未剖、文彩已彰、經瑤緯璧、荊棘生光、
諸山 太古之風韻、何與韶箭同、不一奏三歎、聽者耳已聾、
道舊 尙要不忘、玉應金春、一江風月、鷗鷺嚙々、
門弟 類我諸子、些解博約、三請懃々、風裁可掬、

登座

豎盡二際、橫互十方、誘凡引聖、柱杖一卓云、登箇寶牀、

拈香

大日本國中山路濃州關祥雲山龍泰護國禪寺新董住持前永平傳法
沙門珍牛、恭惟這一辨香、盤屈空劫、引伸無窮、含祥吐瑞、垂蔭聯芳、肅哉、
向黃金鼎中、端爲祝筵、

今上皇帝聖躬萬歲萬萬歲、陛下欽願魏々容容、齊天壤之高厚、
洋々聖謨等、日月之光華、

這香、燕向、鑪中奉為、征夷大將軍源公、震揚台威、增崇鈞筭、仰願輔弼、王室、張皇五霸之懿勳、安撫家邦、鎮聞二南之盛風、

這香、為當山諸檀護、各增福釐、壽考同耀、奕葉累世、

這一辨香、燕向鑪中供養、

本師釋迦牟尼佛、四七二三、乃至日域創統、永平古佛、暨歷代諸尊和尚、以酬法乳之恩、

這一辨香、燕向鑪中供養、當山第一祖無極徹大和尚、第二祖月江文大

和尚、第三祖開山華叟、大和尚、中興長靈鎮大和尚、暨歷住諸位大和

尚、以酬垂統覆蔭之慈德、伏願聯芳萬世、再回一華之春、期果來裔、重布

五葉之瑞、

這香、天真而獨露、叵貌處是真、燕向鑪中供養、當山前董源宗正巖大和

尚、用酬遺託之懇篤、且願祖林秀發、綠萼之鞞々、奕葉生育、瓜瓞之綿々、

拈懷香云、超空有表、為萬象主、曾從薰翻、臭焯於榮壽、已十有餘霜、想可無氣息、即今第二回拈出、燕向鑪中供養、前往元龍笑功、全法六刹、灰頭土面、天老漢用、酬法乳之恩、(歛衣就座)

索語

雲鬢鬢合、乾坤龍橫、身當宇宙、誰是個中出頭之漢、在麼、乃云、有一句子、吾與諸人、不道、師別起、眉毛云、看山僧、眉毛在麼、

自序

牛懶、坐偷、緇流、服、叩提綱、名、這回、稟、錯、鉄、之、任、百、需、虧、乏、堂、供、枯、淡、冒、陞、華、王、座、濫、竽、於、法、筵、惴々、慄々、漸々、汗々、

恭惟、某、大、和、尚、接、武、七、佛、之、師、不、袖、推、轂、之、手、一、擊、機、前、聳、駭、衆、耳、曷、任、

感歎、

次、惟、諸、名、山、專、使、遐、邇、名、藍、耆、宿、隣、峰、列、刹、碩、德、祖、燈、高、挑、作、叔、世、之、光、

明幢德化普被，為一方之甘露，澦何料枉象駕於兔徑，屈虎威於狐窟。一場光輝，何幸加之荷恩寔渥，叙謝舌短。又惟兩序英彥四來，俊髦深韜，師表之光，洪鐘英靈之彩，補苴罅漏，黼黻法筵，道誼之厚曷堪感激。

拈 則

記得世尊陞座，文殊白槌曰：諦觀法王法法，法王法如是世尊，便下座。嘆奴見婢，慙懃若在山僧，則道未在此，何所以未在此，未在此，伏惟衆慈久立珍重。

龜岳山萬松寺晉山開堂語錄

師於文化十四丁丑夏五月受請，住于萬松，越八月十九日開堂。

晉 山

山門 指山門云：鐵壁銀鎖，何妨去來無私，脚下車大蓮開。

圓通殿不假修證，道本圓通，大悲妙辯，風鼓萬松，土地堂護法安人，憑不測神，非人非法，草賊打貧。

祖師堂 鼻孔相柱，矮子涉溪，西天東地，為賊過梯。

開山堂 祖稱未了，殃及兒孫，兒孫得力，重好結冤。

開基祠 於此棠蔭，盍憶召公，聯芳奕葉，清白傳家。

視 篆 佛々寶印，非有非空，當陽拈出，篆文當風。

據 室 老執牛耳，甘晒來賓，萬松雖舊，維命維新。

開 堂 一本敕下有帖字，○國疏之疏字，一本作帖，○山門疏以下，至拈同門疏，五箇拈字，一本總無之。

拈 衣 非量非色，非可力爭，閑雲一片，覆山崢嶸。

拈 綸 敕 覆幬持載，見天地仁，元亨利貞，答恩一人。

拈 國 疏 臺閣賜章，赤水玄樹，聰智難得，與罔象須。

拈 山 門 疏 風行草堰，水注渠成，行藏無私，隨處播令。

拈隣峯疏，千里擇友，百方買隣，相忘乎道，密於齒唇。
拈諸山疏，溪山雖異，雲月是同，道之行矣，輔弼在公。
拈道舊疏，同風千里，山高海深，拍々相應，果是何音。
拈同門疏，損筮相和，輔車相依，同條一句，還我鐵圍。

拈香

拈香云，虔蒸寶爐端為祝筵。

今上皇帝聖壽萬歲萬歲萬萬歲，陛下恭願仁如天，智如神，率土咸歸，
聖化山為礪河為帶，萬年永固聖圖。

此香蒸向爐中奉為征夷大將軍鞏固霸圖伏願上贊，
一人下覆萬民。

此香蒸向爐中奉為大檀主黃門源侯資陪祿算伏願闔國仰仁獻華封
之祝皇家賴德作干城之固。
主字一本作越，
侯字作公。

此香蒸向爐中奉為闔府尊官資陪祿算伏願若雲從龍輔弼其君若樹
區生蔭涼其民。

垂示

荊棘林中進步易，平坦路頭轉身難，超難越易，打開玄關，乃凡乃聖，那礙
往還，雖然與麼，未窮河源，惡知彼崐崙者，裡有窮源底，漢試敲參。
錄不答

提綱

迺云第一義諦，無上妙道，非言語及非情識到，非修證得，非色非心，非有
非無，非因果法，是諸佛之本源，行菩薩道之根本，大眾諸佛子之根本也。
須知處々是道場莊嚴備足，時々即法輪旋轉無礙，然毫釐有差，天地懸
隔，忽起我念曠劫苦因，沈淪無窮，出身無期，若不然，而忽覺苦可厭，了樂
可求，纔念施戒悲智頓發，則慧日麗性空，癡暗揚祥光，雖然與麼，目非有
轉步劫外撒手，那邊底手脚爭得到，恁麼田地，一拂良久云。

音妙木人塗毒鼓調高石女沒絃琴。

拈則

記得閩王請羅山閑老開堂師陞座方收歛僧伽黎乃曰珍重便下座閩王近前執師手云靈山一會何異今日師曰將謂是箇俗漢師拈云羅山昔日應閩王請而開堂方演佛法可護惜閩王深感其德可謂劫外春回錦上布花矣山僧今日應黃門臺下請開堂一無佛法可護惜胡說亂道未免使人疑怪可謂微聲不覺醜也雖然與麼明鏡當臺豈有私照且謂昔日與今日却有異同麼也無良久曰明月蘆花一亘秋細看白鷺下汀洲

上堂小參示衆

祝聖上堂拈香

百億千河不動塵袈裟閑坐向令辰聖朝恩澤周方外欽燒心香禮一人三陽開泰萬物咸新樓至那畔人威音劫外春鹿野未轉法輪龍華三會於斯辰人壽八萬四千歲而不老衣食隨念涌出而常無塵諸仁者諦聽々々還信得及於吾此事麼若信得徹當知從門入者不家珍更可知倒語顛言自合真珍重。

結冬上堂

時節因緣茲結聖制圓覺伽藍打開當陽平等性智如何安居試道唱來看。

迺云結冬安居佛々爐鞴祖々模範鍛凡冶聖投機合矩迥超迷悟豈論

修證驚嶽一華芳鎮流嵩峰五葉果茲熟諸仁者莫作等閑看坐臥經行若失念千佛萬祖過去久。

開爐上堂一本開爐二字作丁丑冬三字

因緣時節火爐開三世諸佛稱善哉說法摩訶般若焰虛空拍手躍寒灰

冬至上堂

垂語云

陰陽運轉不免老至閻王有法請汝飯錢縱有持戒嗜欲修禪爭得求安到于求安一路通天誰遮汝步請試進前。

提綱云

六陰剝盡玄霜封地一氣回復祥雲翳天至道無私大用現前不為而得不求而圓諸仁者却達得其地否莫言斯道在機先斯道玄々未到玄參

拈則云

記得翠微問洞山如何是祖師西來意山曰待洞水逆流即向汝道微曰如何是祖師西來意師拈曰六陰剝盡意難伸山曰待洞水逆流即向汝道師拈曰不人夢驚夜將半石女投梭雲錦成。

己卯十一月六日冬至上堂

垂示 寒暑到來無地迴避衲僧家自有通天活路諸仁者還有到此間者麼試進步來看。

提綱 群陰剝盡時小人行路斷一陽來復地君王載仁澤大道無私天運合節求成而無得無為而自成雖然與麼莫蹶倒遷謝境退墮玄沙場良久曰脫殼烏龜跳天表摧殘枯木發嫩芽。

解冬上堂法語

垂示 春風動凍空聖制打開辰不踐迷悟徑賒超生佛津這裡還有同遊人麼出來看。

提綱 聖制無所住結解此有辰纔逾修證路直達圓通境處々是主處々是賓掀翻大千不動一塵吞盡性海露出妙珍大衆卻體得麼處々楊柳堪繫駒家々門戶無不春春

○按立春上堂枯香法語歟原本逸題

垂示 三陽交代萬物咸春應用應節溫故知新
提綱 天得一以清地得一以寧王侯得一以播仁法門得一以合道且道諸仁者喚什麼爲一不求而得天真而妙唯見萬法皈一仁
鷄狗猪羊牛馬人等流溫故佳令辰尊中尊特乾坤主無盡行藏充剎塵

結夏上堂

安居禁足掬團虛空佛々祖々投此羅籠繩墨外邊切忌打踣跳合規合矩與諸人看若道見得未免脚下入邪路若不見得亦未免辜負主人公畢竟如何 鳥飛不離空魚躍自在淵

退藏萬松阿蘭若上堂法語

垂示 道非有言非無言脫體現成居非有住非無住廣博善住是名平等性智是名無上法門若有箇人試進步
提綱 乃云老身清世渥承恩感戴斯文茲尙存雲霧天涯消碧落蟾光夜闌徹幽昏漂流苦海浮船筏迷悟險途拓法門謹白後來賢聖子如來常在箇紺園此是奉重道場誘導後昆底之醜婆情卽今如行藏合時妙用臨機又如何 良久云 曾倚虛空打窟籠又轉窟籠作虛空虛空窟籠元無一縱橫妙用大圓通

完戒上堂

一佛乘戒流出三寶戒開三寶戒陳三聚淨戒所謂恆沙戒品圓三聚而統收萬行因明惟一念而具足由宗三聚增長三學成就三德圓滿三身還要識三聚淨戒第一攝律儀戒截斷千差岐路莫平地喫咬第二攝善

法戒蹈遍天涯地角莫犯他封疆第三攝衆生戒明月清風隨處吟畢竟如何木馬蹈開雲外路泥牛觸破水中天

復舉李翱太守問藥山如何是戒定慧山曰吾這裏無恁麼閑家具滿瓶不傾出大地無飢人還他藥山山僧不然有人若問三學向他云品不憑貧獨富亦樂品字或誤寫賦

除夜小參

浮世悠悠水上波都來逆順追箭過未覺紅顏爲白髮衝天志氣莫蹉跎

己巳歲朝示衆

濁富漫誇不守貧法華林中舊家珍無邊寶藏販吾有塵點壽量劫外春

節分示衆

寒盡迎陽妙法輪無心無作合天真歡娛常樂金仙境身是長年不老人

立春示衆

氤氳曉色海之東麗日熙々臨萬邦爲見天公無作妙煙霞淡畫吐春容

端午示衆

萬岳翠藍疊亂青雨餘品物氣惺々由來佛國無狂醉冷笑汨羅歌獨醒

半夏示衆

氣冷六月頓忘節忽驚滿盤擎白雪臨機一拍唱哩囉衆慈勿笑慢星拙

半夏示衆

九十刻期今正中無功用處好詮功越修超證是何地寶印當風照已躬

至日示衆

暗識群陰惣剝盡一陽來復是斯辰普天率土皆恩澤嵩祝紫雲端上人

戊辰除夜示衆

紅顏白髮易蹉跎誰羈隙駒逐電過此道不至安穩處飯錢豈許老閻羅

除夜示衆

烏兔奔飛疾於箭紅顏白髮瞬暉遷無為間適安禪客豈許闍王飯醬錢
已是值年窮歲盡諸仁如何將行履噫驅役鬼神徹非知換骨靈方
在大儼

香語

佛誕生

僧祇磨就紫金相清淨光明徹十方合水合泥無吝齋檀波羅蜜滿當陽

佛成道

三祇百劫事奇哉捨命放身知幾回情與非情藏鷲雪懷懼日出惹塵埃

佛成道會獻粥香語一本作獻五味法語五字下有文
政丁丑臘之細註一本悴字作落

尼連河上牧娘兒滿鼎炊成珍乳糜多劫苦辛忘零悴人天景仰等為師

佛成道獻粥

牧牛家有好娘兒滿釜炊成珍乳糜圓滿無邊功德聚人天敬禮在此時

佛成道會午時一本時下有拈香二字
一本誰有二字作未有一

無數劫來得佛攸三祇苦行為誰修兒孫誰有知恩者捨命放身未耐酬

知恩酬恩底置不論恭值。本師如來成道之辰莊嚴道場修設齋筵垂哀容納以什麼為驗。良久云。溪毛沼菜獻真實非色非心禮至尊。

佛成道拈香

僧祇百劫苦修途轉步掀翻生佛衢百億大千一蓮座虛空顯現紫金軀

達磨忌

墻壁如々入道心悲身顯露紫磨金若將情謂擬恩德隻履西歸不可尋

達磨

原本此偈與永平忌香語重複而出今削彼存此

慈心一極仰高天悲體平常現在前非聖非凡非台相正宗豈有別單傳

雖然與麼岡極至恩誰耐報。唵 耻霜籬殘菊嬋妍。

己卯冬達磨忌

夙捨最尊無價珍放身苦海度沈淪悲心蓋覆遍沙界耻以單傳說我人

唵 一辨心香恩未報埋霜殘菊吐芳新

斷臂

會一本题二祖斷臂之頌

通宵立雪放下心身徧地土石皆為黃金克至難至能參難參佛佛證契祖々共印坦坦斯道無古無今吾我自隔鐵壁千尋。唵

斷臂會香語

通宵立雪喪盡已躬短刃斷肘斯道茲東克得於不可得能窮於不可窮

唵 却外春光回滿地布天雲錦展吾宗

斷臂香語

左臂截斷雪月印空心印單傳曉雲橫東。唵 無邊刹界群生類不識

空花入眼中

永平忌

祖師拈脫落心身鼻直眼橫現刹塵誰是知恩報恩者古今未聽有斯人。唵 楓葉野華秋織錦捲舒隨手汝家珍

永平忌

曾投太白脫心身，空手還鄉言自真。觸破大千雖無跡，慈悲海振刹塵塵。

薦耕雲十二世十三世香語

未逢交情親斷金，毘盧海會昨如今。涅槃生死乘悲願，聖解風情不可尋。
拈香云：法喜禪悅無他味，傾倒平生一片心。

耕雲十五世同十六世兩和尚年忌拈香

未值親承扶翼恩，天時奪契使人冤。兔烏奔轉莽七周，宿債酬茲陪法園。
恭惟當山中興梅苑芳，老和尚道德喚光於一時。山門締革於諸堂，實是中興勳，功成不自處。補席於長嗣，舜翁仙芳和尚聖胎長養。方師純孝，一畫於前轍。緇白檀信風靡於德，予先松本城寓居仙壽山下咫尺隣居，交情宜濃。雖然薄緣未接芝眉，曾仙芳禪師扣予於仙壽，告以建法幢之舉。在近使予扶助之誼，予于時遊化佗方，不遇然肯諾已合而未至其期。仙

芳禪師，一朝示姜委後事於今堂上。大宗和尚泊然遷化，實享和壬戌正月二十一日也。未幾日先師梅苑芳老和尚亦以同月十三日示圓寂。嗟幻化變滅，那足言。眞常界中纔一念，閻浮已是七周忌。今夏堂上和尙續已墜緒，樹立法幢提綱宗乘。鳳鸞朔風龍象馳道牛也，幸得償宿債于法席。山門茲日特淨嚴法筵，供養二大老和尚之眞命。懶野焚心香，一縷香煙遍法界。薰聞五分布乾坤，涅槃生死誰存沒。鐵女金人設斷魂，這是供養的不捨悲心。覆蔭后昆照鑑丹悃的如何一言，良久云：疊翠釀藍紺苑興，枝々葉々動南薰。

薦正福桃鷄和尚龍泉舉峰蘇尙香語

無邊法界不容躬，轉步微塵現刹中。誰識天然正福地，無心合道好稱雄。
拈香云：非定非散月印水，非有非無空合空。

大林吉州已詳和尚香語

開化東方樹法幢探竿在手戲隨場無生性上現生滅諸吉祥中示吉祥

拈香云

別來多歲不相識一香通信接淨光

玉龍長老卒哭忌

一本正字作明○真
常二字作真淨二字

如水如雲幻化身轉生轉死法輪新所知障斷正智現真常海中本色人

薦悅岩英林祖門關逢萬壽彭仙三上座香語

祖門遙敲出鄉關是勝因緣不等閑禪悅岩頭充法喜涅槃生死住盤餐

薦雲山上座香語

非色非心清淨躰入生入死本來人影光夜月泥洹路收滿千江萬水心

唳

無所住處能為主刹々塵々轉法輪

薦天龍上座香語

蒲團坐破四禪天遊戲神通不受纏法眷慇懃憑修供香煙堆裏笑宛然

薦五山中菴居士香語

居士臨終之時或彌
陀佛故及于句中

靈光寂照不遮藏五蘊山中舊道場身心脫落只麼得阿彌陀佛露堂々

拈香云

種月耕雲非前日現前佛法在當陽

清操院桂林心月大姊十七回忌

滿天濃露真林叢皎潔冷冷心境空擬問蟾輪麗何處未知自在水晶宮

唳

無古無今真淨海星霜十七瞬眸中

薦登屋明信信士香語

出家孝道賴真常寂照圓明不遮藏如法蓮華杲日熟金仙家國不迷方

拈香云

常寂光中纔念起娑婆既閱七世王

薦義諦道受信士正諦妙賢信女兩靈香語

因緣已得出家兒道樹華開果熟時風響苦空無我韻無邊快樂與君知

拈香云

正義諦上無迷悟煩惱菩提他是誰

薦諸亡靈香語

戒會中

妙有不有真空不空逾聖逾佛無異無同透迷透悟毘盧海洪無彼無此
帝網影融 拈香云 乾坤虛廓僅生白依舊金烏升海東

同

杲日當午煙雨濛朧雲埋山谷雨洗山容請見娑婆塵垢界顯現毘盧眞
法嗣

拈香云

驚起木人當午夢無端咲破大虛空

同

時逢五日祝天中主伴交參空合空空空兮眞實相毘盧遍現紫金躬
拈香云 百千諸佛无量土顯現信人方寸中

薦諸亡靈香語 戒會中

妙湛惣持第一機純清絕點沒思疑當頭開豁毘盧殿不知尊堂主是誰
拈香云 甚深諸佛非影像當午紅輪與示現

同

任手拈來一辨香香雲結成寶珠網寶珠網中融生佛戒定慧薰慈照
曜

拈香云

金鷄報五更金鳥上東天

同

遮那妙躰大地無寸塵毘盧法身虛空無中外木人石女饒閑夢午日三
更金鳥轉

拈香云

二兩無金爲雇人酒買三升醉俗人

諸亡靈香語

大施門開無壅塞生死海枯擎寶蓮傾倒無遮清淨供滂沛甘露酒三千
同

無邊法界一乘蓮五濁劫中色相圓非色非心正恁麼十方賢聖此儼然

舉香云

雲拭青銅，宇宙淨，紅輪依舊着瑤天。

施食供養香語

翡翠盤中珠宛轉，珊瑚枝上月璨然。面前放撒開甘露，直爾清昇覺路天。

唎

薰風四月送涼日，花葉疊錢出水圓。

乾德寺戒會香語

如々真諦出情量，長照毘盧清淨光。頻年踰躋窮旅客，未知身在父王堂。

唎

紅日麗天新淨興，乾坤何處不晃耀。

同

毘盧性海廣，於空顯現吾人方寸中。無自無他無凡聖，豎橫遊戲自圓融。

唎

所知忘處正知現，明々了々紫金躬。

同

天容佑々輕霧轉，曉色冉々畫圖開。露現毘盧真淨境，誰知身在寶花臺。

唎

無際無邊無盡藏，一花一國一如來。

同

毘盧性海絕要津，到者咸投舍那身。非色非心非凡聖，金蓮擊座妙香新。

法華開講

金口親言妙法華，廣長舌相覆河沙。無安三界居安樂，火裏蓮開慈父家。

同完講

常在靈山無上尊，圓音微妙演金言。秋聲萬里旻天月，誰謂收廣長舌根。

己巳歲朝祝聖

至化誰量皈至仁，袈裟閑坐值令辰。普天率土仰恩澤，一辨心香祝一人。

下 炬

柔善院嘉室妙亨大姊下炬

非男非女本來人，入俗合真清淨身。寂光照破塵沙界，生死涅槃妙法輪。
入法名 迥脫根塵豈墮情識，神通遊戲何限境。平等性智無位真，三世十方諸佛國。妙嚴圓成無價珍。

貞操院賢室慈善大姊下炬

掀翻煩惱海，無假彼岸桴。透斷凡聖路，不觸迷悟途。

戒名

據虛立道辨真實，軀生佛如々如真金在洪爐。心眼了々似烟雲拂碧落，有而非有，三界火坑滅靜慮。無而非無，十方佛土現當念清淨妙身遍法界蓮花臺上打跏趺。

眞 贊

釋迦之贊

欲求善知識，無如不妄念。是慈父遺教，金剛王寶劍。

出山釋迦贊

何來此老漢，吞却太虛空。露出三千界，滿天匝地風。

雲中釋迦如來之贊

來去無方所縱橫，遊戲春啼鶯過雨。後大千百花新。

慈氏大士贊

率陀天上坐破金蓮，閻浮界裏好打風顛。

文 珠 贊

大智大癡威雄十方一揮如意，遍界清涼。

曼珠菩薩贊

金獅伏地禮妙吉祥，一切賢聖攝大智光。信手施設如意妙經，抽身空裏未向他藏。

普賢贊

身跨白象手持黃卷，風止動樹月落舉扇。

觀音大士贊

一毫端上現大慈容，補陀巖上觀妙圓通。四禪三惡慈光照融，淨安樂國顯露塵中。

觀音大士之贊

一月印千江，千江即一月。是行住坐臥無觀不自在。

十一面觀音大士贊

十一面々異大慈大悲，同千水萬河影。一月在長空。

同

圓通三昧夢驚覺，曉天鴉昨夜千峰雪。今朝萬樹花。

楊柳觀音贊

絕嶮崑頭柳掛絲，大悲妙相與他視。水自洞竇流深幾，千仞萬尋有誰知。

騎馬觀音贊

大悲妙躰示現於空，發願清淨歷劫不窮。六凡四聖無異無同，泥中木馬良駒追風。

初祖大師贊

空手而來空手而回，單傳一句猶令入猜。

達磨大師

一雙鬼眼滿面虎髭，胡亂禪子錯稱祖師。

達磨大師贊

當門無齒腦後見腮，就虛承實錯稱西來。

達磨之贊

不會佛法，豈傳正宗，西天此土，謾說脫空。

達磨大師贊

衲被蒙頭，萬機須休，休不得處，應生怨讎。

達磨大師贊 七十八翁牛瑞岡敬拜書

外見諸緣，內心無喘，心如墻壁，可以入道。

題達磨畫

一答無功德，勝於百千雷，扶桑與震旦，聾者知幾回。

題達磨畫

雙眼欲看無隻字，一聲未發震千雷，情塵不到寒山路，明月清風滿咲腮。

題扇而達磨畫此首第二句第三句第四句錯語可惜

獨去獨來獨默，開口森羅萬象。

出山釋迦贊

此首原本逸題，因探偶意，私題之，未知當否如何。

檀特山中誰見下，翠微何事起波濤，波間濤上浮沈客，一棹扁舟醉濁醪。

栽松道者贊

手拈寸苗，著力鏝頭，覆蔭天地，忘却春秋。

六祖大師贊

應無所住，好就碓邊，不會佛法，豈解祖禪，唯此不會得，衣鉢傳。

六祖大師贊

碓臼日久，失却工夫，糠粃滿面，未堪為愚，誰道衣鉢，于茲到，盧風前月下，年老心孤，雖兒有力，與渠荷扶。

六祖大師贊

鬻薪孝順嶺南人，無所住中忽到津，踏斷黃梅絕嶺嶮，歸來得不叵酬親。

栽松道者贊

腕頭有力擇苗栽，投宿周家女子胎。換面再來辜負父，香風天下自黃梅。

普化之贊

遊戲縱橫走太空，去來今古跡何窮。夕夕朝々朝夕々，不碍東西南北風。

同

白日昇天無俗期，從來個漢任人疑。驚醒世上閑眠夢，空裏鐘聲母歇時。

布袋和尚贊

閑却兜史宮，遊戲十字街。開展一布袋，稚兒幾萬懷。

同

不居天上閑遊風，塵到處知足世稱福神。

豬頭和尚贊

俗乎非俗，僧乎非僧。豬頭剌肉遊市，鄼棚遊刃空魔佛。木馬走水稜。

四睡圖贊

福智相忘無碍光，虎兒作伴睡同場。娑婆安養閑遊戲，夢裏冥々不覆藏。

寒山拾得贊

詩篇一軸捲收乾坤，可中風月將與誰論。一筭在手，不掃塵埃齋堂收殘，待知己來。

寒山拾得贊

清風明月相共不知，無字經卷義無盡時。

題寒山拾得畫

啼鳥開花轉法輪，不拂大千半點塵。清風竹箒無長短，卷舒忘我興來新。

寒山拾得畫贊

雙眼欲看無隻字，一聲未發震千雷。清風竹箒門頭柳，滿地本來不點埃。

關了真方和尚真贊

心地華綻和氣昏融，性天月充清操秋爽。金襴之傳光被祖宗，龜毛之拂。

播揚斯道前階芝蘭膩慈恩澤後苑松竹長引清風

同

功穰而不住功躰裕而能容物關鎖重々放開三空爐韜洪々鈞陶群品
遍法界無留影跡一毫端顯現真容

同

沒蹤跡處無地藏躬權化門中有力垂手蜜掬靈山曹溪之玄脈長流無
疆親唱洞上永平之正宗希韻合妙和氣昏融風姿秋爽逾生逾死無異
無同永與兒孫好仰真容

耕雲十六世舜翁仙芳和尚真贊

耕雲種月逾疆絕封吟花嘯月入真合俗四聖六凡八達七通法界藏身
毫端現影淨光寂照寶印當風

文政二己卯立春吉祥辰幻寓萬松阿蘭若牛懶野肖像手題

無相之相片雲擬空爲雲爲雨悲願何窮

獨翁富山和尚肖像贊

文化二己卯八月五日示寂萬松老衲牛懶野應需題
影印萬水月在長空遍一切處無異無同

題天台石橋并應真五百羅漢畫

莫言海外天台遠五百應真現筆端濃淡雲中方仰看眼光脚下射衣寒

藥師大黑神農同幀贊

三國聖化都歸一仁拔苦與樂舍己救人無私利物寒林向春

青面金剛贊

龍丁庚申天降尊神勸善懲惡穰妖潤民敬禮信者靈感維新

大黑天贊

惟觀自在大黑天神金鎚在手寶袋隨身拔災與樂護法安人悲心月霽

慈容雲屯歸仰一念福聚無垠

大黑天贊

擊鎚頭上擊碎欲心土石瓦礫變成黃金

大黑天畫贊

文化丁丑試毫七十五齡牛懶野畫

一槌在手擊摧欲心無邊刹土化成黃金

大黑之贊

高捧金槌太打破大貪門一心無取捨七寶滿乾坤

大黑贊

貧無摩訶伽羅天上福自檀波羅蜜多來

三面大黑天贊

三面一身無我無人囊括法界為自家珍拔災與樂稱大福神

日出大黑天

止奢守實福涌脚跟克已復禮德如朝暾

大黑福祿壽布袋同幅之像贊

知足天主大黑天王和氣春陽同塵和光遊戲方所一切吉祥一切吉祥福壽圓長

七福神贊

三國會宴等請福神共舍天樂和光同塵隨應現影于俗于真信崇醮奠幸福當新

七福神贊

三國大宴七員福神黑天立舞一座常春千秋萬歲和樂聞々

老子贊

一條紫氣射塵寰果跨青牛西入關令尹篤因求聖謨三篇古訓落人間

初平仙人贊

胸臆爰伎倆，叱石絢勃起。內剛爾性情，終無觸離喜。

初平仙人贊

金華山裏老神仙，塵表風流誰耐傳。叱石舉筇羊自躍，更知變態得無邊。

鍊拐仙人贊

卓立一叉筇，艸衣纏葛藟。噴吐總非他，滿肚亦自己。

太公望贊

非龍非鵬王者之師，見兆元龜竟起滑涓。

伯夷叔齊贊

操持清潔自天受，嗟嘆國家多內醜。倚義諫爭西伯前，首陽遮莫周之有。

張華老贊

一瓢在手，迸出神駿。視虛為實，疑殺幾人。

關將軍像贊

龍逢之冑，仕炎漢後。義蓋一世，勇冠宇宙。貌最傀偉，顏孔神秀。傍覘藝苑，足免固陋。魚水之對，竟不乖舊。壽亭之封，不昭以富。鼎峙之雄，無出其右。剛若而人，宜尸而祝。

菅谷正當肖像贊

乃父乃祖，咸懷忠良。柔惠且直，罔有不藏。君后仁慈，敬德為先。其德不差，壽考不忘。蔚兮蘭桂，式詒馨香。

戶田氏肖像贊

恁忠克忠，小心舍弘。若揚祖烈，仕居中良。輔理內事，能充稟倉。乞骸綏老，安禪探堂。嗚呼德蔭，蔽芾永流。厥芳。

尾藩中山內蒲明居士肖像贊

身老昇平，忘案排無。為閑適富，生涯孝悌。忠信維家，寶鎮附兒孫。不失懷。

賀偈

賀全中首座

龍蛇混同如海容，已他相忘若空融。這般境界還誰得，人天百萬仰標丰。

賀量道首座一本題道首座賀偈

頻年行道々難臻，伎盡廻途僅轉身。不覺眺望天地外，萬方風物帶春新。

賀俊光首座

吳山越水掬風煙，雲思月情秘錦篇。狡黠自號未曾點，謙光坐照盞簪賢。

賀等寬首座

攀險陟艱臻，叵臻脚頭力盡興。良新雲蹊如絕懸，天外爲信神仙別有春。

賀大量禪客首衆興國山

獅座領來興國場，况逢禮樂復先王。斯文異日長珍重，時奮腕頭大力量。

賀德有首座

平常擔道若忘躬，當任安然首座中。虛白懷無容，知解可期松竹若清風。

賀哲拳首座

縱奪逢場拈一拳，解言淺水難容船。觀音高掛機前鑑，好入圓通補半筵。

舉良要具壽充桑山智勝之首版

享和癸亥夏安居日，淵才雅思文中王。言默曾舒錦繡腸，衆上今猶教爾播。豎三橫十見華光，寓尾之萬松林下。七十八翁牛懶野書，以與桃嶺具壽。

法本法無法，無法亦法。今付無法時，法々何曾法。

賀俊光和尙初歩于安昌

一本題俊光和尙晉山賀偈

曾睎月色洞庭秋，抱盡清光賞味幽。今欲指真伺闍類，江天携上一層樓。

賀曹全和尙住雲興寺

等視群生行大慈，欽風麟鳳亦來儀。蜜雲彌布天將雨，正是法源起涸時。

賀梵瑞和尙住永安寺

瑞雲深罩古梵壇，况又天龍護永安。箇裏幸遭祖規復，世情莫作等閑看。俱胝和尙應松浦，侯之請住西溟之瑞雲。幾于一期時，武豪德虛席。大檀越彥根侯，嘗嘉師德茲敦請。師繼其席法門盛事莫大焉，因賦偈陀一絕祝其化永大云。時文政戊寅仲冬吉祥日。

西溟垂釣一葦年，頓捲絲綸東海天。有日鯨鯢窮衣盡，踳踳不二最高巔。

賀天龍鈞公移錫于泉岳

天龍推轂仰高僧，藉甚聲名若日升。斯道如今將拂地，當途莫讓策真乘。奉賀泉岳洞明大和尙鈞命雄據于大中甲刹。

無邊瑞靄互東方，起定焚香祝彼蒼。法運當知有時在，熙然旭日上扶桑。

賀東林達津禪師開堂演法

宗趣相持各逐追，群盲摸象竟何爲。淡交振古在忘我，祖意如今獨讓師。

鐵額銅頭陪後日，天部八龍掃前時。始知此老機鋒棘，更沒傍人捋虎髭。

賀耕雲堂頭初轉法輪

一片閑田傳祖翁，耕雲種月舊家風。無邊祥瑞蒸爲飯，大地虛空等飽充。
鳳林富岳應公，今冬初建法幢，遙聞其盛舉，不堪抃躍。因賦其雅名及雅號，聊以充賀云。

作家去就自無方，鷹舉阿誰堪近傍。定慧岳頭春富貴，喚回薜蔔滿林香。

題畫

題扇面人物畫

一瓶一老漢，風流坐碧苔。抱杯何相想，恐有花落來。

得一釜金畫贊

孜孜甘辛苦，諄々感天心。風雷撼土去，始見一釜金。

題影法師

一箇須彌全現前，起居行止不談玄。風流猶似維摩詰，月落誰看遊那邊。

題途中影法師

相識依稀至，追隨若我情。午時成一體，斜日又雙行。過處終無跡，口開似有聲。願君爲怖闇，每夜月清明。

題途中影法師

朝乘新霽自相逢，踏雪尋花同逐從。莫逆逍遙添默坐，無爲恬淡伴吟筇。風吹雙燭生雙影，月落萬江移萬容。知爾風流高物外，去來今古不停蹤。

題鬪體圖

非生非佛爾是阿誰，現前面目要與君知。

九想圖贊

摩訶般若波羅蜜，諸佛世尊說是經。非字非文須信解，廣長舌相響幽長。

猿猴捉水月畫贊

無物上或脫一句歟

垂手猶撈拽，或晒彼至愚。彼亦其愚晒，孰克捉空乎。水裏之蟾影，非有亦非無。如克拳之去，當是真丈夫。○○○○無物奚齟齬，諦當彼不得恰洽。應易須。

衆盲摸象圖贊

手眼有力猶滯一方，謂見全象誰辨真妄。真乎盲乎滾々者盲，己見己斷。

情解渾忘諸相非相，真相莫藏。

題龍畫

是斯陽物變化得中，起雲降雨厥澤焉窮。

黑龍引

萬甲藏雨氣挾風，一朝飛出硯池中。頻年烈旱野無草，林神社鬼伎屢窮。焉得霹靂煩一怒，齋送甘霖報年豐。假令雙睛未輕點，驚殺人間幾葉公。

題虎畫

幽巖有色懸泉無聲，虎兒入定似有所瞠。

題牛身虎

全身未出竹林中，已見雙眼千里雄。三友不知何處睡，覺來一嘯起清風。牛

田園傳于祖父，耕于時種于時。不令倉稟虛竭，安閑好眠于時。

題臥牛圖

已了南疇事，脫得鼻繩頭。肥膩常充足，起臥任優遊。

臥牛贊

山南水北足肥膩，農事了來得睡安。

同

禾黎艱難曾自識，鼻繩脫來眠得饒。

題牛

紫白紅花黃鳥路，悠然背上任牛行。

題野馬圖

水草無羈絆，優遊牝之貞。神骨真龍種，寧追千里名。

愛狗讀書之畫贊

閱書消幾日，飼狗愛情親。遙越風塵外，誰敢識厥真。

題兔子望月畫

雲綻銀天月色寒，影涵秋水玉波瀾。露華寂寞無人境，兔子望空心不瞞。

題鷄畫

黃距絳冠羽族神，報晨啓物是天眞。千秋萬古策勳者，藉汝幾多得日新。

題蝦蟇圖

寥々默々併吞虛，空更深誰識。當冲月宮。

梅贊

鍊樹枝頭放開玉花，不老春色長苗爾家。

梅之贊

梅笑春風多少樹，雪殘曉霽兩三峯。

題梅畫

從容寫出一般春，冰質芳唇銜玉新。寧與四時開落變，不萌枝上吐天眞。

竹 贊

通身虛廓清節永持歲寒添翠期鳳來時

題 竹 畫

咄々寫成竹十竿虛心卓立抽貞幹無非淇澳猗々物多福奚慚來鳳鸞

題 竹 畫

葉々枝々如碧雲長閑高節絕塵氛龍吟虎嘯何相待不斷清風生此君

題扇面竹畫

清風如此處曾與故人期

題 蘭 畫

馥郁清香無盡期誰於眼所解能聞

岩窟之菊贊

莫言後世無知己黃菊依然巖門新

題紫茄畫

不動唇皮須喫却天然妙味與君知

同

紫岷崙子風味天真當面放出令喫誰人 喫 從空放下與君喫

山水之贊

爲餌青松子作衣紅葉蘿幽棲殊地脉高枕養天真

題山水畫

風流浮世外一去不知年孤棹吟波上抱琴嘯瀑泉

題扇面山水之畫

春風江上無波浪一掉扁舟向何行山下老翁似相待不言畫裏足交情

題扇面山水畫

牛背牧童任步往可憐驢客走東西山行水宿春風裏何事青天白日迷

詩 偈

戊辰除夜口號

鳥飛兔走逐奔波，六十六年只麼過。行道都無能一事，假名深慚擬僧伽。
己卯歲旦

古稀加七向令辰，時恭喜感安道心。遺却聖恩無作德，正觀四海擊壤民。
與仁科居士偈三首

文化戊辰孟秋遊信中避暑，於仁科姓之樓頭有扁榜則勅賜宏振大
禪師見示居士尊偈也，因予亦攪步其高韻合應居士之需爾云。

澆季如君火裏蓮，平生活計在安禪。名賓合實稱宗藏，善根宿植不偶然。
天龍河上宗居士，航舌駕流快談禪。生死岸頭風月好，逍遙何處不安然。
大人垂手高難闕，耻我無曾力談禪。真俗隨機泥水境，春花秋月見天然。

無準和尚來訪求一語書以與之

尋言求語掬風流，看否洞庭明月秋。寒碧瑠璃清不徹，乾坤載在一虛舟。
何某禪衲曾途拾得金紙扇，扇上畫松，松亦金色。茲過弊廬，需賦其事，因書此與之。

拾得金紙扇，卷舒松韻寒。行藏君自識，不必問監官。

呈龜岳林丈室

萬松高秀幾千尋，積翠飛來落客襟。何但龍花三會曉，威音劫外舊知音。

和臥龍池亭主人韻

長松樹抄月輪懸，影怪臥龍池亭眠。此夕明珠欲探去，却忘脚下問安禪。

和大梁山主韻

高照大梁山上，月千秋影落五湖流。知君一口併吞去，吐出須彌四大州。

文化十五年戊寅之元旦

雪花垂竹絕風塵，窓外何知物色新。時向金鷄東海曉，喚回萬國一天春。

抄冬偶作

西去東遊何有期，浮雲流水自如斯。今年三百餘旬夢，獨坐深林睡一枝。

偶作

起世風波無止時，前波逐去後波追。追來逐去皈何處，從古一環回若斯。

謝友人見惠袖爐

一點含星火，雪中憐道人。謝君先造化，袖裏竊催春。

謝妙解和尚見惠烏藤杖賦一偈

非長非短烏藤杖，高拂江湖幾片雲。實際地中無立處，好携六道打群生。

禪友紫蘇漬梅干盛一臺携來，因戲呈梅干禪師

破顏微笑凌雪傳，一華五葉謝枝圓。紫衣纏坐壺中定，欲餐法味口流涎。

探梅

殘月瀨茫望不堪，思君方欲渡江南。縱令白雪埋行路，好向清香深處探。

題彦山龜石坊雪舟假山

補天餘石詎爲山，知是心僧雲水看。遊戲風流三昧跡，鎮西靈境一奇觀。

○逸題

端歌長嘯誰相和，懸路千盤忘直斜。滴々香薰岩下水，春風無處不烟花。

題唐崎松

孤松老去龍鮮古，眠雨吟風摩碧空。雲蓋三千餘丈影，浮沈湖水萬波中。

寄七十一夢

七十餘年一眠春，去來爲主又爲賓。東西南北在何定，鐵錫杖邊遊戲新。

同

扶桑東海問蹤跡，雲外崢嶸入嶺重。白雪四時千萬丈，青天映出玉芙蓉。

送師虔和尚之土產題

驚峰名產物，風味倍醍醐。鼓舌聆餅子，好於無價珠。

送量道禪士還鎮西

足下春風起，今朝向鎮西。衣中無價物，萬里照昏迷。

文政壬午予幻化金剛馬，齡八旬因說小偈。咦，慶雲開闢滿八旬。

翁牛瑞岡叟自稿

八十年前一小童，是誰能作八旬翁。無初中後初中後，物外乾坤示異同。

○真蹟逸題後署七十六齡牛懶叟書

嘗聞釋迦佛，先受然燈記。然燈與釋迦，只論前後智。前後體非殊，異中無有異。一佛一切佛，心是如來地。

送統州和尚

不眷院子事，南詢辨道由。來竭力頻，無影林中安。手脚皈鄉，莫惜棄家珍。

雜著

正法眼藏涉典續貂序

左思欲賦三都構思十稔門庭藩溷皆箸筆札遇得一句卽疏之牛退萬松請黃泉禪師爲補處焉禪師常置筆札於座右遇得一事卽疏之牛怪其耽文字讀之始知輯眼藏之典故也禪師行脚中刻高祖行業圖布諸四方及其匡徒諄々誨人勤行古道與牛戮力復一國之宗規左思賦三都售其才耳禪師竭忠於祖庭豈同年而論哉牛也老矣不能見此篇之大成願題數語以植來生悲心之因云壬午初春滿八旬翁珍牛衲志

戒文

夫戒也者唯一佛戒而已無有二乘三乘差別差別全在於各頭邊譬如琉璃盆中盛諸雜華黃花至則其盆忽成黃赤白紫青亦復如此而琉璃

未始嘗有青黃赤白定色佛戒之於衆生也諸佛也共是唯一佛戒通身徧身也菩薩修之圓六度緣覺持之證無生聲聞了之取涅槃蜎飛蠕動資焉踔跳日月風雲資焉運行蛄蝻資之丸之蜘蛛資之網之衲僧家假名作本來面目拈來拈去活潑無碍豎而連之作三皈橫而陳之作三聚展之開之作十重作四十八乃至作八萬四千無量塵沙波羅提木叉而無量塵沙波羅提木叉未始嘗出一佛戒一佛戒未始嘗隔無量塵沙波羅提木叉喻如從阿耨達池注出四河湏々湏々流而不息盈溝溢池千派萬流清濁分湘灌注村邑聚落增益東田西畝終亦歸大海而無異流可別也是以從一佛戒中流出有三歸三歸亦唯一歸依佛而已歸依佛中具足恆沙德用譬如摩尼珠應物顯現其所顯現雖無量惣括曰歸依佛歸依法歸依僧歸依法亦含攝歸依佛歸依僧歸依僧攝歸依佛歸依法亦復如是故隨舉一戒一切戒全在其中不支不混混則知處可謂珊

瑚枝々撐着月此三歸依亦父母於無量淨戒遂出生三聚十重等三聚淨戒者曰攝律攝善攝衆生也攝律義又王於一切諸戒一切諸戒悉共藏身於攝律義中攝律義正當恁麼時又無歸依佛歸依法歸依僧名相可得况凡聖迷悟開遮持犯乎雖然官不容針私不妨通車馬於是有攝善法有攝衆生三聚已立則有十重有四十八輕聚者何一切諸戒定諸德所聚集也一切律義六度十二因緣三十七品八十一科無有不從此出生者淨者何無有諸瑕玼可除亦如大虛純淨無諸遮障故能包含萬象森羅而不餘也次第配之攝律義即歸依佛攝善法即歸依法饒益有情即歸依僧也席有天巖都寺曰三聚三歸配當業已聞命敢問三聚配三身而可也乎師曰嗚呼起予哉我雖未聞古來有此說理則爾焉一僧列坐其次曰如余所參則諸法實相是攝律義實相諸法是攝善法諸法不碍實相實相不碍諸法是饒益有情戒也師曰昔日五百名說身因世

尊悉可其所說四八談不二文殊亦證明之各々自海印放光箇々立
 轉處耳十重者何曰不殺生等也重者雖似對輕之言非全爾只此十重
 重外無輕是即吾人本有諸佛眼睛非從外者也殺生者何一念瞥起即
 是破犯呼為不生早是變了依什如是既是戕賊本來主人公了於是躰
 得則一切諸戒一串々來無毫釐欠剩即是宗門一大事因緣者乎雖然
 如此理外無事外無理々事圓融宛轉無碍依舊守操草繫繼跡護鵝
 浮囊可保玉卮可滿是之謂宗門護戒之行持也

與橋完平書

懶野牛啓此來邈絕鴻鯉不審近况何如緬惟萬福青春杉德操寄書請
 讓災迎福之事於潮尊者與余因共領焉從事於斯中夏又來書曰有大
 感應幸甚且又請讓迎亦從其意云然余竊謂德操之為家未為全得也
 何則在家自有在家之法出家自有出家之法苟不依其法則余未知其

可也今視德操之為家多寓東都之別業不常在其父母之家適其在家
 亦不過十之一其若是則絕非在家之法也佛言在家有別佛父母之謂
 也夫父母在則出入起居取捨行藏吉凶禍福一皆告之而蒙其教誡且
 暮溫情而省玉牀其沒也出入起居取捨行藏吉凶禍福亦一皆告之而
 蒙其冥感且慕恭敬而盡其祭奠其如是佛所謂孝子者也况先大人信
 三寶如彼其篤仁生民如彼其深苟且暮率其子弟臣僕恭敬其靈告之
 祭之不少怠廢常不離其家庭則其冥感豈少々佛言有別佛蓋是之謂
 也德操謀不及之漫務外游而欲恢張其門戶背佛意遠之遠矣夫苟背
 佛意則幽冥中先考豈肯領余衰老且不謀夕以故傾倒若是聞德操視
 吾子威於嚴父吾子以時告誠且示之以致余區々之意令眷皆無恙不
 煩為致意時秋冷白玉不乙仲秋文政己卯乎既望

大聖佛母准提懺法跋

余住山之初、有故屈招潮尊、專修準提法暨其懺、一基於此靈感已甚、全出意表、至若起癡疾、變性情、則振古所希、有謂之權化薩埵之力、不亦可乎、懺儀刻成、而徵余一語於之、吐露丹青爾、文政己卯孟春下澣、幻萬松牛瑞岡、謹撰併書、

涅槃像裏書 浪華法華寺所藏

洛陽土佐繪處內、近佐筆、表具師片岡庄兵衛光○ 一字不明

恭以輝騰古今、日而佛月而佛矣、下生界者、悉皆無不蒙此慈光、粉骨碎身、亦此恩難報也、於此攝州西成郡北中島內、有行者觀念無常、而企奉加勸於諸輩、故寄志同志、而行一味平等之法、不論貴賤老少、隨其分而施其財、而度與丹青者、到于這尊像、諸尊菩薩摩訶薩、及一切諸衆生等、悉皆圖寫了矣、其形相、子細看來、奪人眼睛、悉趣感底、時節也不可勝數、於戲、畫工之妙處、奇哉快哉、剩一軸之表具、而太無端盡

善矣、謹奉寄進於柴島自笑菴、伏希以此眼功德力、到大涅槃岸、珍重病僧居檐下、菴主令予秃筆、強而記焉、不顧不才、雖老眼不分明、不得拒辭、曲而應其意、漫著述奉加之意、趣者也、諸輩之姓名、欲記之、繁多、故願主行者一人之名字而已、願主 住菴比丘智傳

承應二癸己年春二月佛槃日 雲水 浮舟野納謹拜書

爲 先祖菩提 錢屋 總兵衛

爲 先祖菩提 同別家 勘兵衛

肯住智傳安置涅槃曼陀羅壹軸、以永爲當山之法寶矣、雖然、年代遠大、而將屬朽壞、于時幻住海外老人、欲修補焉、諭森井總兵衛同別家勘兵者、則喜捨淨財、再爲表莊者、實各自法地之莊嚴也、

寬政十三歲辛酉仲春初一日、海外老人嗣子、珍牛鑑寺龍光謹拜誌、

(右ハ珍牛禪師ノ眞蹟ナリ)

法華寺 棟札 縦二尺五寸九分横四寸
楷書珍牛禪師親筆也

く 護法諸天大權真宰 維時文化三龍舍寅五月廿七日上棟之

奉請眞如實際莊嚴無上佛果菩提祝 獻 富山六世珍牛代造

ン 日本國內大小神祇專祈山門鎮靜中外咸安火盜潛消諸緣吉

辰 大工 村上佐兵衛

大工 光川太助

焉棟梁新田邑 中川長兵衛

大工 中川吉兵衛

大工 中川虎吉

永平高祖行狀記の末文

吾高祖無作の徳業はいかでか凡人のはかり知るべきや、されども、
時のひどの、顯に見、ひそかに聞し、奇瑞のたうときを、後の世の人に

も知らせばやと、前に波多野氏が需めによりて、建搦和尚の記せられしが、
委らなれども、風に草の偃迄におよばざるは、末の世につとめ易き法にあらざればなり、かゝる御法をば、今更に拙きうつし繪となし、
將た眞假名もてしるしぬるを、智者達の閱みて、老婆親切とあざみたまふ共、
よしや賤手巻くり返し、祖恩の高き御徳を、四の海の隈々迄も、
愚人とともに仰ばやと、おもふあまりにこそ、文化五のとし冬

珍牛しるす

和歌俳句

大黒、畫贊 亨和甲子元旦懶野牛戲書

あらたまのとしきのへの神風はここに吹き來ていつも春日氣機

芭蕉翁像、贊

月花を唯その儘の姿かな

寄 儀 祝

五十年をは磯によそえん限りなき眞砂にかゝる和歌の浦波

宿夜寒 邑

またも来て見まほしぞ思ふ旅衣夜寒の里の夏の月陰

丙寅 仲秋

此の夕へ秋の最中の知られけり朗らくと月苦え渡

る光前教寺詠朝雪

罪深き我住家とも白妙に瑤敷わたす雪の曙

眞贊ノ二

釋迦文佛

接物度人萬徳尊紫金光聚蓋乾坤一音遍徹衆生界誰在塵中聽未聞

文 殊

經卷無一字惠劍截虚空心想似留影眞身却是濃

同

阿羅波闍那性海不容身五字隱心體却居念想中

同

青眸紺髮氷雪肌膚藏眞常質現童子軀露出金毛遍界背乾坤騎却活
文珠

同

通身斯智慧遍界是文殊七佛之師範人天之慈嫻手拈利劍跨獅背心

體欲委不可圖

同

覺城東際擅童兒自肯堪爲七佛師如意藏來奇特事慧門却失兩莖眉

同

綠髮青眸孤影癯金毛背上示軀經卷持手只如是點慧分檀在半途

文殊普賢一紙

覺城東際愛童兒白象金獅作馬騎如意殘經拈草喫正中的意付阿誰

普賢大士

倒騎一色象王身在半途應刹塵願海無邊無盡日大行薩埵願盼頻

十六善神

憶昔尋香城外春如今展出畫圖新諸方眞箇見般若加護豈慳十六神

十六羅漢

應身二八畫圖新現住世間三界珍保護迦文親付屬入中天上引塵埃

觀音大士

塵々水月刹々圓通成觀自在負普門中

同

觸破塵々水月場因循處々空花座看々紺目寸眸中廣豁普門元弗鎖

同

普門示現聲聞身跌坐吉祥艸做菌須識眞觀清淨觀慈悲廣大却同塵

同

百千三昧水中月四八應身空裏華歸去補陀岩上坐青山老却幾烟霞

同

稍入衆生心水流妙容示現古岩頭頻伽餅裏春將半慈眼不慳消寸眸

同

見聞一一隨他去，綠水翠楊入眼涼。念々心々觀自在，桂輪移影掛愁腸。

白衣觀音

縞衣薩埵倚巖臺，端嚴妙容儼異哉。蟬鬢白毫觀，愧欲蠶眉紺目禮。攄花榮覺樹春常嫩，月滿江灣偶獨來。慈憫豈止南海上，掛同心水濁清埃。

地藏大士

悲憫度孤窮，晨朝入獄中。輪回能化主，金錫動遙空。

地藏大士

救孃光目女，極苦代輪回。振錫劍林折，刀山觸處摧。

同

每日入於定，歷遊窮厄岐。悲心推願轂，蕩子引迷兒。

同

清虛何日曾成佛，不是心兮不是物。六趣輪回賣弄人，度生能化畢還弗。

同

一顆寶珠輝惡趣，六環金錫破昏衢。白雲深鎖閣，正覺誘引迷兒去。嶮途

同

倒懸辛受代群生，遊戲自由三界城。劍樹刃山悲憫淚，拋身願海任縱橫。

維摩大士

毘耶城杜口不二，門宏開同道。逢識破青天，震怒雷。

同

杜口毘耶深病根，文殊識疾說無言。座分三萬鋪方丈，金鎖挨開不二門。

同

毘耶城裏撒塵埃，不二法門震迅雷。多少聲聞僉飲氣，相逢知己舌締苦。

迦葉尊者

金色頭陀居第一，飲光示跡練行精。將身尊者隱鷄足，親付俟慈氏下生。

阿難尊者

二十年來護法藏，金言強記獨扶揚。正宗命脉豈容私，機契因緣承飲光。

達磨大師

竺乾來此土，氣息肯難通。雪掩蘆花淨，却迷一色功。

同

顧盼賤親大心機，日暖黃雲掩紫微。面壁豈只休少室，空觀慚愧片岡衣。

同

萬里鯨波不顧軀，梁邦魏闕去留孤。蘆花混雪一雙眼，面壁九年辜負吾。

同

明月一船得々來，清風無限掃梁臺。秋林葉落眼皮綻，不用雙眉八字開。

同

梁邦魏闕往還遺，板齒當門欠不全。馬面驢腮何似處，鶴長鳧短自嘶憐。

片岡談契昵皇子，少室挑燈接大賢。勿謂翩翩々，携隻履見來不直半文錢。

二祖大師

換骨願神斷臂翁，少林得髓特靈通。安心獅吼透今古，一道寒光輝日東。

六祖大師

黃梅山裡事，碓舂米熟多時滅。祖宗開口啓師，欠篩在嶺頭誰敢敵。言鋒。

洞山大師

君臣借位設階梯，隨節應機趣不齋。懶唱金鷄高屋曉，却彰自駟爛銀蹄。

永平高祖

撥草久曾伴翠微，天童山裡脫真機。自將日域純金粹，換得宋邦鑰子歸。

臨濟和尚

黃檗捧頭六十連，太愚饒舌解空拳。滄沱波惡爲喪劍，今古幾人謾刻船。

德山和尚

猛省占津滅祖宗，電光石火不看蹤。棒頭諦得無生忍，殺活都來一欸供。

普化和尙

有頭無尾風顛漢，扶起臨濟應化賓。鈴鐸啓々踈踏地，域頭白日上清旻。

蜆子和尙

拋釣不有意，取熬淺水張學蝦蟆撈。勿怪正爲良价嗣，神前一着話頭高。

秘魔巖

回途披得破襦衫，氣急殺人坐黑暗。來者木叉施一等名，高千古秘魔巖。

栽松道者

鏝頭有力擇松栽，借宿周家期再來。換面改頭孤負父，高僧七百屯黃梅。

香巖擊竹

國師塔畔幾經基，秃帚掃收片瓦飛。脩竹青青如有意，正是落節忘知時。

船子夾山

得藥嶠禪卒不酬，花亭江上弄橈頭。夾山有路入烟浪，點首來時着逆流。

百丈野鴨子

野鴨目前穿眼皮，鼻頭扭住報君知。飛過去曷曾飛去，落節須還他馬師。

看月西行

弗顧禁闌北面躬，倭歌通妙仰高風。擔燈拄杖穿鞋立，貪見月遊銀漢宮。

花岳孝禪和尙壽像

同產同鄉共小童，結仇君依孝本忠。眉毛掩眼鏡中像，把筆頻驚班白容。

圓鏡

圓覺海中浮慈航，合同賓主若龍驤。波平月朗帆臻岸，下載清風最吉祥。

圓相

外無稜絳內貯乾坤隱，白顯黑餘爺欠孫。拈做鋤斧瞎驢締窶恩，不知重回頭負恩。

解去脫空，落魄奴不辨真實，是凡夫一生味却祖師意，訛謗諸方稱大蟲，

圓相自題

圓融法々透坤維，雙照雙忘也太奇，陀地境寬塵刹界，隱明顯暗是阿誰，

同

闡提無性無奇特，藟苴生涯堪可惡，天地踏穿虛觸途，呼吸偷閑暗消息，

頂相自贊

從來不坐鳳凰臺，向下懶揚茅戶埃，弗借驢胎兼馬腹，膽量五逆暗聆雷，

懶贊

炙背地爐焚糞火，王命頻到踈降牀，祖禪不會只無事，朝啜寒涕煨芋香，

髑髏

殺鬼誰能虐，親故喚不諾，身皮火大乾，肌膚終沒燒，狼藉骸堪捐，乾坤成

眼被鼻齋穿，脚親餓狗嚼，支節各分離，爛泥又混悞，骨散跡寂寥，大虛獨廓落，

同

彼此難讓，荒草堆人々，無意愧痴獸，識情不到吹毛利，眼在髑髏眉底開，

同

艱窮變盡，僵溝壑，曬齟離々，分手脚，白骨草間枯，髑髏霜天夜月談，般若，

大黑天

寄踪天上分身來，不惜七珍兼聖財，鎮護家堂長施祐，金槌袋子笑盈腮，

三面大黑

人間天上撒塵埃，不惜七珍兼聖財，三面一頭成慶祐，金槌袋子笑盈腮，

蛭子即惠比須

竿頭携赤鯛，福祚播無窮，倭國冠胎產垂踪，民戶中

福祿壽

衆星拱北辰，天上本無倫。福祿尤奇怪，異形化老人。

同

位貴衆星拱，北辰隱身彰。影混人倫頭，長脚短現奇。異福祿，拔貧壽老神。

同

垂拱位高天，北極由來聖跡化。人間長頭短足尤奇異，福祿與他不等閑。

福祿神

奇怪妙齡現，老顏携肩扇杖。隱人間衆星屯，北雖端拱福祿與他今弗慳。

布袋和尚

上方鼻孔不屬正，偏闔浮睛睡。喚地生天和，上看僧求這箇回程誰與半文錢。

同

慈氏應身閑布袋，上方不坐闔浮鄉。半開囊口盛三顆，如意天然生吉祥。

同

展開布袋盛乾坤，十字街頭彌勒尊。睛睡闔浮多少容，日南當午爲黃昏。

同

上方內院占本國，錯就闔浮應化賓。括地該天閑布袋，街頭肩杖咲闔々。

辨才天

八臂一身現女身，寶珠如意擊人天。衆生心水來移影，無碍辨才滿願輪。

青面金剛

青面鬚忿怒，相頂門豎眼放威光。摧邪祛僻吉祥至，天怪冰消家國康。

韋馱天

護法將軍驅鬼馳，儼然眉目見成禪。梵行不受諸天欲，運轉二輪付與誰。

白澤圖

聖家無到恆如意，秘殿深閨冷不祥。人面獸身何似處，冰消天怪鎮高臺。

受染明王

是大明王忿怒躬，信到愛染得無窮。一身六臂頂門眼，靈驗不虛帶矢弓。

秋葉權現

鳥背兩翼大威神力能，鑑至誠効驗難測。

神農

鹹醉濃淡憩苦辛，死生幾度見精神。藥王興起冠今古，極濟無窮利世民。

鐘馗

忠心鑄鐵大唐臣，文武簪纓誰肯均。幽魂精神驅疾鬼，殿階提劍守禁宸。

菊慈童

綠髮童顏未改形，由來仙洞菊常馨。南陽曾飲下流者，羽化不成成延齡。

三聖圖

儒童連老聃，觀面會瞿曇。醉齋非一味，舌頭區分三。

太公望

老叟安然坐渭濱，直鈎只涉三荊。春釣磯有意，惜香餌西伯拜將躬。就賓。

孔子

厄窮陳蔡若無悞，鴛至天兮魚躍淵。興廢春秋魯出聖，祥麟彰瑞孔文宣。

莊子胡蝶

莊周爲蝶々，化莊周忘機。遺己只得夢遊，百年一睡乾坤靜。無限逍遙無處取。

蘇武

蘇武

海嶋爲囚屈北風，君忠不變苦艱中。噬氈可恤高持節，寄信漢家付塞鴻。

關羽

桃園義氣古今豪，三戰雄名傳虎牢。赤兔加恩宗漢室，華容報德脫魏曹。

美髯命重錦囊勅，隻手携來偃月刀。睥睨吳王身後魄，効軍逼敵爲兒壘。

同

偃月寒光雪刃銛，衝天義氣傲清廉。錦袍恩賜不更故，對御漢庭握美髯。

孔明

三顧草廬恩弗辜，漢中計霸異穿窬。手持羽扇挫將士，頭戴綸巾趨勇夫。孟獲七擒臻伏意，魏延一負授禿顛。呼風使鬼臥龍子，魚腹豫排八陣圖。

東方朔

漢武委身同世曹，三回宮掖偷冰桃。胸藏王母延年術，偶在人間意氣高。

東坡居士

頂笠踏雪行，物景亦多情。埋路竹林下，吟眸慰老生。

虎溪三笑

忘禁酒碗自厮携，不覺交肩過虎溪。飛瀑千尋望曷極，從斯三笑得名題。

靈照

明白精神辜負吾，老龐有者女丈夫。捥籬知是價多少，名在古今德不孤。

蝦蟆仙人

洞明胸宇入仙家，功借煉丹朝報霞。吸氣吐雲延壽計，名傳塵世稱蝦蟆。

牧牛童子共睡圖

牧童日暖困凭牛，牛亦一般春睡優。彼此忘無心水草，背身自閣把鼻頭。

寒山拾得看經圖

共住不知二士靈，箒苕拋擲國清庭。彈呵屢咄聖僧嘯，吟咏聊邀明月停。餘飡齋時來盛筒，殘羹粥罷去收瓶。夙埃滿面接面笑，擬解一卷無字經。

寒山

時々遊國清，竹筒盛殘羹。降跡法王子，持經字不明。

拾得

途中借伴逢携筭混凡庸騎却聖僧了厨堂喫等供

豐干

閑却西方偶遊天台共虎瞎睡饒舌揚埃

唐人

清人自畫見精神眉目淵澄迥出塵外國來多含殺氣溫良風標暖如春

聖德太子

粟散豐聰闍化深班鳩宮裏爲甘霖日羅瞻禮灘波畔救世大悲觀世音

同

王胤由來誕日東佛身委處班鳩宮念禪再世能強記粟散釋迦惠炬紅

同

正且共噉生厩戶未離襁褓誦梵文扶桑佛法興隆主古往今來碩德芬

同

春宮垂跡克通神神字自成漢字親覽遍聖經如拜而約章五憲無不真

同

記憶念禪最後身九重鳳闕化豐聰定場通駕飛龍馬親到衡山那寺中

天神

輔弼聖朝積代鄉奈何護口傾簪纓告文翹足訴天帝靈鑑不昧感至誠

松守眞操亭古院櫻愁而前焦枯京鎮西只有一輪月影照飛梅夜々清

同

賞弄梅花不愛塵况於文字自精神鎮西影照一輪月北野松寒千樹春

渡宋天神

手裏梅花携得輝曾遊宋土現神威夜深參究準翁室換却簪纓經鳩衣

芭蕉翁

翁也併名甲古今言明篤實意尤深句占純粹多感動聞得何人不作吟

靜心居士

明月靜心呼吸間，躋攀弗碍涅槃山。臨行書字法身句，禪悅唯々遂性閑。

卒塔波小町

由來雲上官家女，懶見墳傍白髮顏。卒塔橫身賓與主，倭歌妙在古今殘。

雨乞小町

仙女偶曾遊世中，荒草愁久萬民窮。祈歌感動神明妙，普濟甘霖見變通。

鹽汐海人

白浪堆中化海人，隨干就滿自精神。倭歌通妙貫今古，却現弄潮不定身。

畫贊ノ二

猿猴探水月

狂猿痴捉水中月，涼兔元來不下天。只報世間多少客，清光獨朗未生先。

枯木猿猴

騰躍見胡孫，攀條做返翻。枯灰心念事，跳躩休勞煩。

獅子

推落嶮崖迷子訣，金毛倒豎勢凜烈。未臻平地解翻身，哮吼獸群咸腦裂。

虎

毛彩霧晴威氣勃，蹲踞養得爪牙獠。雙睛循日有盈缺，千里縱橫獨不驚。

畫龍

風雲際會見昇降，倒嶽傾湫弗可雙。神仙有功扶造化，甘霖普濟賑家邦。

鶴

恆宿寒山百尺松，縞衣濕露不群容。危巢清結千年夢，何日飛來止畫中。

竹 鶴

有摩碧落鶴，壽幾千春。丹頂甲群羽，昂然自出塵。

竹 雀

雀兒一隻代棲鳳，刺操呈貞心。裏空香嚴昔日臻，擊節為君葉々起清風。

同

展有千尋摩碧穹，掛無一葉起微風。雀來收翼憩止久，鳳浪勿貪墨畫中。

柳 雀

淡粧綠髮翠成陰，洗面梳風夏木深。一隻倦俟如有意，頻々樹抄搏双禽。

蘆鷹圖

畫圖展處到秋風，爽氣寥寥滿碧穹。一隻塞鴻收兩翼，青雲望斷荻蘆中。

鷺立寒水圖

一軸乾坤占得閑，明曛偶爾弗成班。有聆座上春雷發，必也羽衣難喚鯉。

鯉 魚

三月桃花禹級深，衝浪勢有不群容。細鱗豈是池中物，一旦飛騰見化龍。

松

昵近秦王稱太夫，春齡不改四時殊。鶴止為保千年壽，偃蹇扶疎入畫圖。

竹

操節清廉待鳳來，裏虛表寂任人裁。隨風影動寒山箒，似掃玉樓階下埃。

梅

擬占春苑百花魁，一朵芳唇鬪雪開。疎影橫斜堪畫處，精神傍月獨徘徊。

畫 梅

嫉花精神只一枝，冰肌玉骨自天姿。寸眸活計饒春色，不見芳英落地時。

同

天姿嫉月玉肌聯枝黃鶯彈舌出谷遲々寸眸活計饒春色弗見精英落地時

蘭

天產異凡卉紫芽出紫莖清標君子質弗等衆芳英

同

清馨凌絲葉光潤厭群芳借路孔文子美嘆王者香

同

染眸翠色四時青秋後弗群霜落零花影葩癯形愈美芬々秀異襲衣香

蓮 畫

凌水團々擎碧落莖高翠々出青泥人間六月苦炎熱侵暑池塘亭不齊

菊 畫

吐芳異國香嗜昔愛南陽隱逸冠秋後精英傲曉霜

同

精英紅白鬪秋叢隱逸高標嘯露濃靖節先生今不見展圖尙耐憶慈童

水仙 畫

偶下人間仙子姿通身恰若碧瑠璃中心擎出精銀盞蓊藥含金暖處披

蘆花

蓑笠漁翁烟水間扁舟扶棹入紅灣一行歸鴈度空靜共逐蘆花深處還

山水 畫

畫圖一幅晴窓裡多少遊人凝寸眸流水遠山茅舍靜遠巒橫似隱斜陽

富士

一朵芙蓉筆尖披容儀可見小須彌朝雲暮雨遮不得天入畫圖鐘秀奇

富士山

一朵芙蓉筆尖披日本國裏小須彌凌雲八葉豈凡境天入畫圖人令奇

團扇

通體是全機清風起一揮同鄉涼與暑來處任君知

同

揮揚能掃埃除暑要奇哉携去軀堪笑微涼何處來

同

呵暑人間呼叫怨午天子夜蕩精魂一揮忽變清涼境無口通身吞熱煩

題團扇

生涯洒落汝扶儂最愛流金酷暑中扇面微涼隨手足不同上下四維風

同

不借東西南北風一圓消息至胸中納涼誰不除炎熱解襟襟懷直啓蒙

扇子

靈機似蜜蟄隆冬三伏信通堪啓蒙一道微涼隨手足不同上下四維風

第四編 附錄

瑞岡珍牛禪師立身賀偈其他叢錄

賀珍牛首座罷參蓬萊亮天和南手書

失却人間天上路披毛戴角轉風流大家無錯名賓祝隨處自在更勿休

珍牛禪師首衆於大雄精舍偈以奉賀喝正安永五丙申仲春吉旦

幻寓桃源山鐵駝逸宗和南拜艸

牯牛背上眼如眉水足草肥牧得歸異類中行雖睡穩耕雲種月莫違時

珍牛禪衲首衆于長州大雄山禪刹山偈以寄賀國泰智外拜艸

不喫三春水草生被毛戴角檀名聲人天盡力可雖見哮破大千威氣獐

賀珍牛禪傑領大雄第一座乞莞荐丙申夏安居日東廬山僧

趾大和南艸

禪師

處々綠楊繫千羈，江湖有孰爲鞭笞。通身脫體無皮骨，穩臥雄峰月半規。
喜珍牛禪師得大雄分筵兼錢送西歸道樹拜艸
才竹邀春西海還，破霞稍欲涉間關。選僧殊許大雄瑞，分座商量不等閑。

○ 應珍牛力生繪予陋質乞贊語金山二十二代亮天自題印

五處住山隨化緣，好心空服打閑禪。沒後生前餘敗闕，永附兒孫失祖傳。
珍牛老和尚畫十五尊之後文政癸未冬應需畫加一尊併讚耻爲
後人鴻鷺之笑，崑崙老衲豪潮記時年七十有五印
釋迦文後阿逸多前兩間佛法荷擔一肩

珍牛禪師對鏡自畫安眠坐像道友豪潮尊者贊之

贊曰：應需題豪潮印

相逢皆得意，何處是他鄉。日月遊方錫，乾坤午睡牀。

萬松珍牛禪師晋山開堂疏

國帖

今茲文化丁丑，吾殖福場龜嶽山萬松寺，虛席於是乎。請前龍泰瑞岡
珍牛禪師補處本寺爲國開堂演法

右 蜜 以

倡道行規，須是蘊美哲匠，擢才護教，必憑檀名賢明方外。今乏倡道之師，
海內孰爲護教之任。曇華易覩，知識難逢。伏惟新命珍牛和尚，應世才優，
慕古志粹，明珠不避濁水，遇緣卽宗。達士豈守一隅，隨處爲主。勿謂高風
叵延屈，欲爲末流。作著龜時哉，瑞氣連蓬萊，祥雲擁紫極，鯨鳴鼉吼，歸然
紺園改觀，虎踞龍蟠，鬱乎金城，逾固力提綱要，丕壽國家。

八月十九日齊朝御花押

山門疏

文化萬年，星躔丁丑，秋八月十九日庚寅吉旦，張州藩名府龜岳山萬松禪寺山門兩序，欽奉大檀越黃門源侯鈞命，特請前席濃之龍泰瑞岡珍牛大和尚，補處本寺開堂演法，爲國祝延，聖壽萬安者。

右竊惟

國家豐饒，張州爲天下最叢林，殷盛龜岳處洞上，尊劔茲金城萬仞，雄圖特有蓬萊羣僊，靈府宜得絕世之雋傑，扶起墜地之宗綱，賢檀護法非輕輿情，屬望惟重，道之行矣，熟敢間然，恭惟新命堂頭瑞岡牛大和尚禪師，花叟遠孫，海翁嫡嗣，六處已拈弄爛狗斧，隻手幾提挈折脚鐺，偃蹇六十三馬將軍，瞿鑠對勳業鏡，追攀一千歲掌和尚，從容披般若函，加旃禪餘妙探，瑜伽蘊筆下巧戲畫圖癖，可謂嚼蔗漸入佳境，嘗滴能諧全潮者也，林巒改觀，優益現瑞，萬松鳴漢，何翅萬衆歡呼，一香答恩，丕祝一人，叡算。

山門兩序等九拜謹疏

隣峯疏

龜岳林萬松禪寺者，海東法窟我侯植福之道場也，先是虛其主席，今茲丁丑五月，黃門源公遠屈請珍牛禪師董其雄據焉，於是本山兩序卜此吉辰，請師爲國開堂演法，蓋大禮必竣，其人也，隣峰黃泉，忝唇齒之交，聊裁短疏，用述欵誠，其詞云。

徑寸之珠，光照十乘之外，盈尺之表，影質兩儀之間，況有惠之孤，豈無燭之流輝，比門連薺，喜乞醯之近，東舍西隣，得呼茶之親，請回篋輿來董叢席，恭仰讚。

本山新命牛公大和尚，胸空萬有，眼綻十虛，始鳴法螺於洞螺，化昌東向，後立龍門於龍泰，道貴南方，天下盡稱天上，鱗海內原知海外，子堂々之陣兮，所向無敵，赫々之德兮，隨處立宗，智悲兩端，機接朱紫，遊戲三昧，才

溢丹青謾道鼠副乎福嚴孰知牛坐于興教希慰望雲霓爲雪林巒慙高唱九如兼報三顧

于時文化萬年第十四八月現大光小衲黃泉稽顙九拜疏

諸山疏

諸侯之國尾稱雄允文允武萬松之山禪爲甲輝古輝今縉紳之風不讓魯齊龍象之會可比雪天自非德高臘高難愜緇仰素仰恭惟

新命萬松瑞岡牛大和尚禪師靈機轉々法眼明々有行有藏解篆於四名藍一弛一張當途於一望刹雲夢八九吞胸中虛堂八十驚海內眈々虎視諸方狐兔潛蹤鏗々獅絃闔國榮瑟收響人負弩矢而前驅天興雲煙而殿護如我泉岳曾有龍泰之緣轉師牛車寧無雀躍之喜頻報國恩必光法運

維時文化丁丑秋八月十九日泉岳透明九拜謹疏

道舊疏

茲審尾州路龜岳山萬松禪寺頃虛主席前席龍泰珍牛禪師榮膺樞府鈞命以補其處貧道聞斯盛舉不勝鳧藻緝詞綴疏以愆憑其賀云百穀登否在務勿失其時禮樂興廢係人宜擇其任失其時者無致報秋之効非得其人爭見繁興之功恭惟

上珍下牛老和尚露地白牛人中獅子一吼腦裂盡地一隊狐狸無心絢羊海外無邊風月柔亦不茹剛亦不吐仰之彌高鑽之彌堅燒却八字娘生之眉萬行無轍迹壁開豎立頂門之眼虛空不掛針曾怪浩然鐘彩韜光豈圖勃焉隨緣赴感轉最勝輪遊蓬萊島大悲圓通著真如冠蒞太一宮色身三昧穆如清風德音盈耳依稀落月曾遊關懷翕然向風具瞻三代禮樂肅爾望闕式祝萬壽無疆

昔文化十四丁丑夏五月吉日吉祥僊洲焚盥九拜敬疏

同門疏

同門白眉瑞岡牛兄大和尚居濃之龍泰全盛而恬退於世若遺自爾不擇華夷行化諸方亦殆乎十餘年文化丁丑八月應大檀越張州大藩鎮黃門源侯之懇請外住龜岳山萬松禪寺且有龍命專作興禪苑古規於宗教最爲重義不可辭讓因消吉日祝國開堂法族之慶莫大焉緝詞謹裁襍線之疏以表緬悃云右伏惟

曩者惟慧定老應請與望曾住此山而今瑞岡牛兄榮中公選視篆本寺蓋磯之相感矣寔理斯令然焉似貽孫謀於往時足觀祖業於今日密惟新命萬松瑞岡牛兄大和尚禪師當機絕對妙用應緣瓜瓞綿々高拔宗族之花棣萼鞞々獨奪佛爽之才金錫風生入蝦夷雲靑鞋狐健步武野

月撲碎諸方瑠璃盃拋擲自家革皮囊與其戲弄大千混迹於塵途孰若主張正法定鼎於祖域摧邪論追妙喜輔教篇慕仲靈窮當益壯老當益堅過人也遠如說而行如法而住舍師其誰天道好還人心有竣宜想輔車相依之誼庶見篋壙相和之情伏冀
嵩祝後天聖圖以副先師重寄

幻住湖東清涼愚弟寂室堅光九拜謹疏

同

今茲文化第十四歲次丁丑仲秋穀旦法兄牛公老和尚應尾陽公敦請視篆府之萬松祝國開堂劣弟富山觀此盛舉不勝歡喜敬作短疏以奉祝賀右伏惟

弘道在人須任明眼宗匠輔教崇學職由達識碩師苟非擇彼規度復古之人安能救此浮靡奔今之弊美矣一出乎公選盛哉咸成乎至誠恭惟

萬松新命瑞岡牛老和尚禪林典型法門領袖降神洞螺之島岌嶷超倫
 訪師豐浦之城操行拔衆放下閑工夫忘圭角豁開大爐煅鍊聖凡貶剝
 諸方震懸河之慧辯歷住數刹擅跨竈之雄名曾遊化於奧東邊疆德風
 草偃今應請於海東法窟玄侶雲從龜岳林枯木再華蓬萊宮瑞雲四起
 遙祝觀筭高唱天保九如速慰輿情快拈心香一炷
 前龍泰愚弟富山九拜謹疏

萬松珍牛禪師下火

○

無著黃泉禪師

五字分明山下牛不侵苗稼去優悠回途唯念水兼草誰道天明把鼻頭
 伏惟新般涅槃前永平萬松二十四世瑞岡珍牛大和尚禪師

駢且有角 白却現髮

向祖庭事耕種 任躬鞭輔

爲人天拽犁耜 竭力田疇

或臥桃林野 或伴函谷遊

吐舌而喘翊宰相之曲調 燎尾而戰破魔軍之陰謀

五圖徒模樣 十頌未定酬

庖丁不能窺過樵之尾巴 甯戚焉得謠人海之蹤由